

令和2年度  
看護学教育ワークショップ報告書

看護学教育支援におけるICT活用の可能性  
Web開催



**主催** 看護学教育研究共同利用拠点  
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

**日時** 講演 (WEB配信) 令和2年10月21日(水)~11月10日(火)  
グループワーク (ZOOM会議) 令和2年10月27日(火)



## 目 次

1. 千葉大学挨拶	1
千葉大学大学院看護学研究科長 中村 伸枝	
2. 開催趣旨	2
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長 和住 淑子	
3. 令和2年度看護学教育ワークショップ 実施要領	3
4. 参加者概要	6
《講演》	
5. 【講演】「ICTを活用したグループワーク～コロナ禍での模索のプロセスと課題」	8
講師 大塚 眞理子 宮城大学看護学群 教授	
6. 【講演】「ICTを活用したシミュレーションラーニングの実際」	23
講師 阿部 幸恵 東京医科大学医学部看護学科長	
7. 【講演】「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う対応について」の解説	34
講師 高橋 良幸 文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官	
《グループワーク》	
8. 全プログラム参加者グループ別名簿	42
9. グループワーク	43
10. ワークシート (A～D)	51
11. ワークショップ評価	55
12. おわりに	70
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 准教授 黒田 久美子	
13. 実施体制	71



1. 看護学教育研究共同利用拠点 令和2年度看護学教育ワークショップ  
看護学教育支援における ICT 活用の可能性  
千葉大学挨拶

千葉大学大学院看護学研究科長  
中村 伸枝

本研究科附属看護実践研究指導センター主催の看護学教育ワークショップにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。新型コロナウイルス感染症の影響が長期にわたるなか、さまざまな影響を受けている教員、職員、学生のみな様、ケアの対象となる方々に心よりお見舞い申し上げます。

このようななかでも、今だからこそ、必要とされるワークショップをめざし、初めてWeb開催によるワークショップを開催することとしました。

本センターは、我が国の看護学教育分野で唯一の文部科学大臣認定教育関係共同利用拠点として、看護系大学各々では解決しがたい課題の解決や取り組みの共有により、効果的・効率的な教育改善を推進することを使命として活動しています。

このたびの新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの看護系大学では、これまで対面で行っていた教育支援方法を変える必要に迫られています。そこで、本年度のワークショップは、「看護学教育支援における ICT 活用の可能性」をテーマに企画しました。全国の看護系大学が、看護学教育支援における ICT 活用の経験や実践知を共有し、ICT活用の可能性に加え、課題を検討することにより、従来の教育を見直し、より本質的な看護学教育へと転換する契機となることを願っています。

ご参加いただきました皆様が、日々のさまざまな努力や対応を振り返り、参加者の方々と共有することを通して、明日からの看護学教育に活かせる成果が得られることを期待しています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 2. 令和2年度看護学教育ワークショップ開催趣旨

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長  
和住 淑子

新型コロナウイルス感染症の影響により、看護系大学では、これまで対面で行っていた教育支援方法を変える必要に迫られた。医療機関への立ち入りが困難になり、臨地実習の運営が困難になった例も多い。しかし、そのような社会状況に直面しても、看護学教育の本質を見失わず、様々な工夫で教育が行われている。これを契機に、教育におけるICT化をすすめた例もある。

そこで、本年度のワークショップでは、看護学教育におけるICT活用の可能性をテーマとした。看護学教育は、伝統的に対面での授業や演習、臨地での実習によって行われてきており、それが特徴でもある。しかし、国は、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会として、**Society 5.0**を提唱している。**IoT (Internet of Things)**により、今までにない新たな価値を生み出すことや、社会の変革（イノベーション）を通じて、これまでの閉塞感を打破し、希望の持てる社会となることが期待されている。そのような未来に向かい、本ワークショップが、看護学教育におけるICT活用の可能性と、方法は変わっても堅持したい看護学教育の本質と、変更可能な方法の柔軟性について検討する場となれば幸いである。

講演の部では、宮城大学の**大塚真理子**教授、東京医科大学の**阿部幸恵**教授には、まさにオンゴーイングの**ICT**を活用した教育実践の一端をご紹介いただくことができた。また文部科学省の**高橋良幸**看護教育専門官には、臨地実習の運営が困難になる中、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の解釈と運用を巡りタイムリーな情報提供をいただいた。ここに改めて感謝を申し上げたい。

なお、本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、初めて**Web**開催によるワークショップとなった。ワークショップの企画・運営自体が、「**ICT活用の可能性**」を検討するプロセスとなり、主催者側の我々も大いに学ばせていただく機会となった。看護学教育研究共同利用拠点として、ポストコロナ時代のより有意義な**FD**研修の開催方法の開発に、今後も挑戦を続けていきたい。

### 3. 令和2年度看護学教育ワークショップ実施要項

#### 1. テーマ : 看護学教育支援における ICT 活用の可能性

#### 2. 主旨

このたびの新型コロナウイルス感染症の影響により、感染者数の多い地域の大学では、これまで対面で行っていた教育支援方法を変える必要に迫られた。医療機関への立ち入りが困難になり、実習の運営が困難になった例も多い。しかし、そのような社会状況に直面しても、看護学教育の本質を見失わず、様々な工夫で教育が行われている。これを契機に、教育における ICT 化をすすめた例もある。

そこで、本年度のワークショップでは、看護学教育における ICT 活用の可能性をテーマとした。看護学教育は、伝統的に対面での授業や演習、臨地での実習によって行われてきており、それが特徴でもある。しかし、国は、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会として、Society 5.0 を提唱している。IoT (Internet of Things) により、今までにない新たな価値を生み出すことや、社会の変革（イノベーション）を通じて、これまでの閉塞感を打破し、希望の持てる社会となることが期待されている。

そのような未来に向かい、看護学教育における ICT 活用の可能性と、方法は変わっても堅持したい看護学教育の本質と可変可能な方法の柔軟性について検討する場としたい。

#### 3. 目的

講演では、参加者が、看護学教育支援における ICT 活用の経験や実践知を共有し、ICT 活用の可能性について示唆を得る。

全プログラムの参加者では、講演で得られた示唆に加えて、自大学の現状分析にもとづき、WEB 会議によるグループワークに自ら参加する経験もいかして、自大学における看護学教育への ICT 活用の可能性、課題を検討できることを目的とする。

#### 4. プログラム概要

「講演のみ (WEB 配信)」と「全プログラム (講演+ZOOM によるグループワーク)」の2種類の参加方法があります。

##### 1) 講演 WEB 配信

###### (1) 日時

10月21日(水)～11月10日(火)まで

※全プログラム参加者は必ずグループワークの前までにご視聴ください。

###### (2) 講演内容

- ・「ICT を活用したグループワーク～コロナ禍での模索のプロセスと課題」  
宮城大学看護学群 教授 大塚真理子 氏
- ・「ICT を活用した学内実習・演習 (仮)」  
東京医科大学医学部看護学科長 阿部幸恵 氏
- ・文部科学省「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う対応について」の解説  
文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官 高橋良幸 氏

どれも、20～30分の講演とセンター教員との質疑応答10分で構成する  
視聴後にアンケート(質問を含む)を回収  
質問への講師からの回答を後日、参加者にフィードバックする。

##### 2) グループワーク WEB 会議 (全プログラム参加者のみ) 10月27日(火)と事前資料提出

###### (1) 目的

自大学の現状分析にもとづき、他大学とのピアコンサルテーションを通して、また WEB 会議によるグループワークに自ら参加する経験もいかして、自大学における看護学教育への ICT 活用の可能性、課題を検討する。

(2) すすめかた

6名程度のグループ単位で、事前資料の共有と当日の会議をすすめる。

各グループに担当センター教員が入る。(ZOOMの会議主催者となる。)

事前資料は、CQI ワークシート (A と B の 1) を活用する。

送付等の詳細は、別途連絡する。

10月27日(火)のZOOMによるグループワーク

10時～11時半

13時半～15時

5. 主催

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

6. 実施方法

(1) 日 程 上記プログラム概要のとおり

(2) 定 員 【講演のみ】 定員なし  
【全プログラム】 24名

(3) 参加要件 【講演のみ】 どなたでも参加できます。  
【全プログラム】

看護系大学において、組織的な教育の質改善(CQI)を推進する教員

原則として、准教授以上とし、以下の①～②を充たすことといたします。

① WEB 講演の視聴及びZOOMによるグループワーク全てに参加できる。

(参加者全体への影響がありますので、途中参加・退席は認められません)

②自大学に関する情報を収集し、事前資料を提出できる。(A4用紙1枚半程度、グループワークを円滑にする目的なので、書ける範囲で構わない)。

【推奨 OS 環境】「Windows7」以降 (Windows)、「Mac OSX」以降 (Macintosh)

【推奨ブラウザ】「Google Chrome」、「Firefox」、「MS Edge」、「Safari」

古いバージョンのブラウザだと再生できない場合がございます。

動画を視聴する際には、最新版のブラウザを使用することを推奨いたします。

(6) 参加申込 【講演のみ】

本センターホームページ(<https://www.n.chiba-u.jp/center/>)にある看護学教育ワークショップ申し込みフォームより、お申し込みください。

\*申し込み〆切：**10月6日(火) 17時**

【全プログラム】

看護師等養成課程を置く学部等の長の推薦が必要です。本センターホームページ(<https://www.n.chiba-u.jp/center/>)より所定の「参加申込書」をダウンロードし、看護学教育ワークショップ申し込みフォームにPDF添付の上、お申し込みください。

\*申し込み〆切：**9月30日(水) 17時**

(7) 参加者決定

【講演のみ】

お申し込み確認後、必要事項（振込先等）をメールにてご連絡いたします。

【全プログラム】

10月9日（金）に、参加の可否をメールにて通知します。定員を超える応募者があった場合は、参加申込書等を参考にして決定させていただきます。

※参加の可否を、事前にご確認願います。

※ZOOMの接続等に関することは、別途ご連絡いたします。

- (8) 参加費 【講演のみ】 5,000円  
【全プログラム】 20,000円  
※ 参加決定の連絡の際に、振り込み先をご案内します。

- (9) 修了証書 全プログラムに参加した方を、修了要件を満たしたと評価し、千葉大学大学院看護学研究科より修了証書を授与いたします。

7. 注意事項

- (1) 申込み受付後の受講料の返金はいたしません。  
(2) 大規模な地震・風水害・降雪・事件・事故・疫病等により、研修の開催が困難であると主催者が判断した場合、全てあるいは一部のプログラムを中止することがあります。この場合、受講料の返金はいたしません。  
(3) 資料の送付、修了証書の発行等につきましては、研修の進行状況等により判断させていただきます。

8. 個人情報の取り扱い

看護学教育ワークショップへの申込みの際に提出された「参加申込書」等に記載の個人情報については、看護学教育ワークショップ業務及びセンター年報への名簿掲載のために利用し、それ以外の目的に利用することはありません。

9. お問い合わせ先

〒260-8672 千葉市中央区亥鼻 1-8-1

千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第三係（センター研修担当）

TEL : 043-226-2464

FAX : 043-226-2382

メール : kango-cqi@chiba-u.jp

## 4. 参加者概要

■全参加者（講演のみの参加者含む） 89 大学・1 専門学校・2 医療機関・1 民間企業 247 名

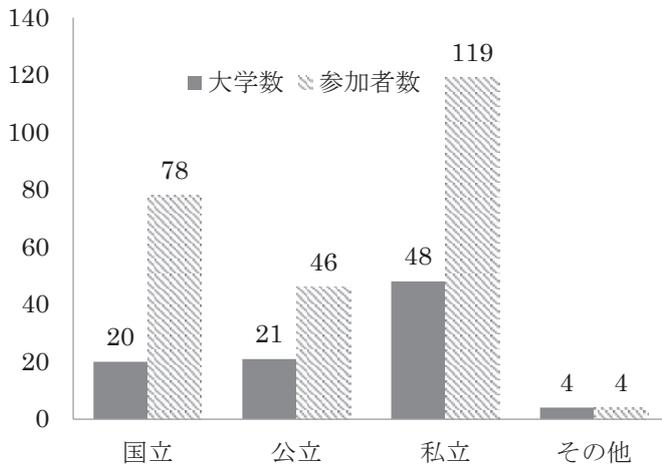


図1 国公立別参加大学数・参加者数

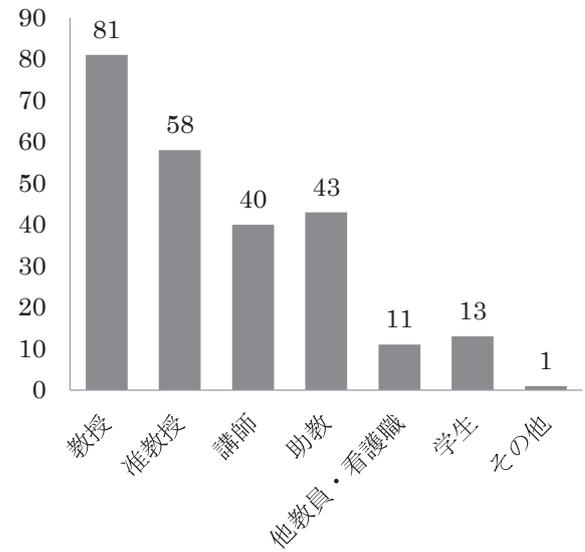


図2 職位別参加者数

■全プログラム参加者 31 大学 32 名

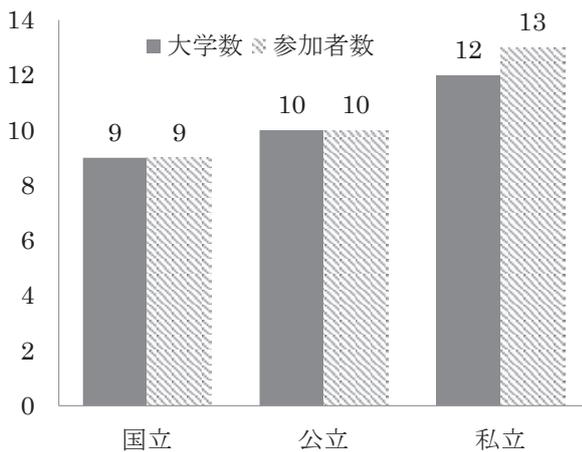


図3 国公立別参加大学数・参加者数

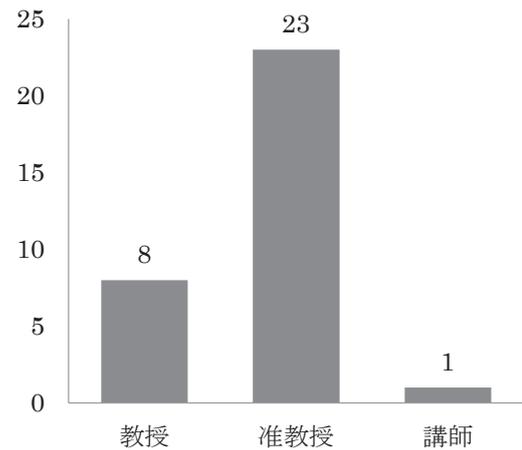


図4 職位別参加者数

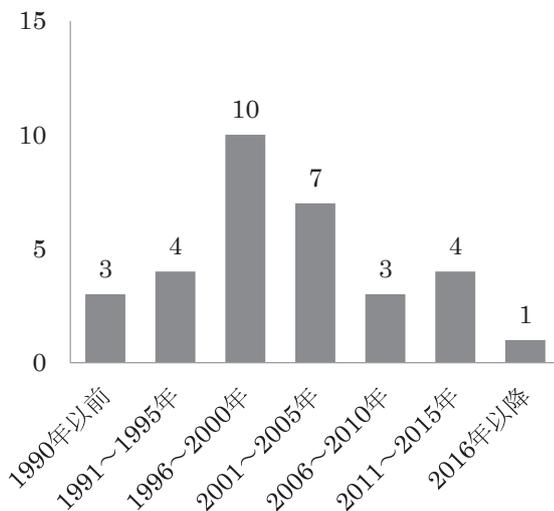


図5 開設年度別参加者数

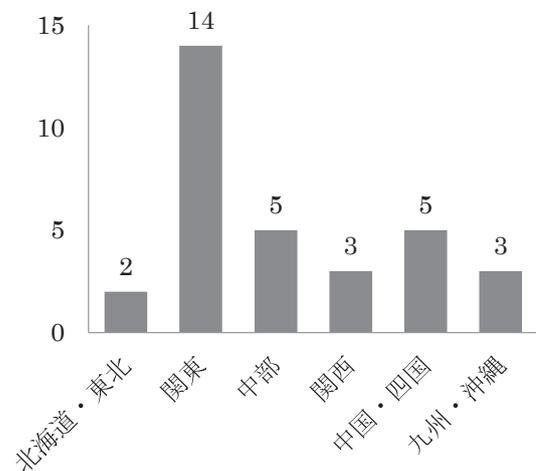


図6 全国ブロック別参加者数

看護学教育支援における ICT 活用の可能性

# < 講 演 >

**【講演】** ICTを活用したグループワーク～コロナ禍での模索のプロセスと課題

講 師：大塚 真理子

(宮城大学看護学群 教授)

**【講演】** ICTを活用したシミュレーションラーニングの実際

講 師：阿部 幸恵

(東京医科大学医学部看護学科長)

**【講演】** 「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う対応について」の解説

講 師：高橋 良幸

(文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官)

看護学教育研究共同利用拠点  
令和2年度看護学教育ワークショップ

## 看護学教育支援におけるICT活用の可能性

# ICTを活用したグループワーク ～コロナ禍での模索のプロセスと課題～

大塚真理子（宮城大学）



看護学教育研究共同利用拠点  
令和2年度看護学教育ワークショップ

**COI開示**  
講演者：大塚真理子

講演に関連し、講演者に開示すべきCOI関係にある企業などはありません。

## 講演内容

1. これまでの電子書籍とシステムを使った授業、グループワークの試み（2017年から開始）
2. コロナ禍での突然のICT活用推進（2020年度前期）  
ICTによるグループワークを取り入れた授業構成
3. 取り組みの評価と今後の課題

## 教育改革の中で感じた疑問と課題

- ▶世の中のICT化に、大学の情報システムが追いついていない
- ▶病院が電子カルテになっているのに、基礎看護教育は取り残されているのではないか
- ▶学生の授業評価アンケートでは、事前学修・事後学修をしている学生が少ない
- ▶教科書を買わせているのに、教員が教科書を使っていない
- ▶1年生から4年生まで一貫した老年看護学の教育ができていない
- ▶学生は動画を好むが、授業中の動画視聴に時間をかけたくない
- ▶グループワークがしにくい環境（階段教室、机椅子の固定）

## 電子書籍導入のきっかけ

- ▶2017年入学生から、ノートパソコン必携になった
- ▶3学群共有のスタートアップセミナーで、大学での基礎的な学習スキルやグループワークを学修することになった
- ▶大学生協から、VW-eBooks専門書学習ビューア（以下、ビューア）の紹介を受けた
  - ・図表や動画が掲載されている看護の電子教科書が使える
  - ・ビューアに他の電子書籍や教員の配布資料、教員作成の動画も掲載でき、学生が授業時間外に視聴できる
  - ・ビューアの機能を楽しく使える

## 老年看護学教育に電子書籍ビューアを導入

2017年	2018年	2019年	2020年（コロナ禍）
1年後期（概論5コマ）	2年前期（援助論Ⅰ）	3年前期（援助論Ⅱ） 3年後期（実習）	4年前期（総合実習）
	1年後期（概論）	2年前期（援助論Ⅰ）	3年前期（援助論Ⅱ） 3年後期（実習/学内）
		1年後期（概論）	2年前期（援助論Ⅰ）
			1年後期（概論）

- ▶ パソコンに電子書籍をインストールするにも困難な学生
- ▶ 「紙の書籍の方がよい」の意見もあり
- ▶ 何で老年だけ？

- ▶ 事前学修、授業、事後学修をプログラム
- ▶ 自作の動画教材を電子書籍ビューアにアップ
- ▶ アンケート機能の活用
- ▶ 学生の電子教科書アクセス数がわかる

- ▶ 学生独自の学修方法を共有
- ▶ 電子書籍ビューアを使ったグループワークの実施

VW-eBooks  
 専門書学習ビューア  
 のアイコン



2019年入学生（1年後期）のビューア

教員による  
 教科書の書き込み  
 (学生と共有)

- ビューアの機能活用
- ・教員が引いたマーカー
  - ・付箋に参考文献紹介-URLをクイックして文献に飛ぶ
  - ・教員のメモ
  - ・ペン字で強調



## GWの例

階段教室で

ビューアにGWシートを配信

グループメンバーが付箋を貼りながら対話するGW

各自が入力



- 目標：①高齢者との交流会で各自が学んだことを共有することができる。  
②交流した高齢者の方の一生と健康について考え、意見交換することができる。  
③グループワークの成果を整理してまとめ、発表することができる。

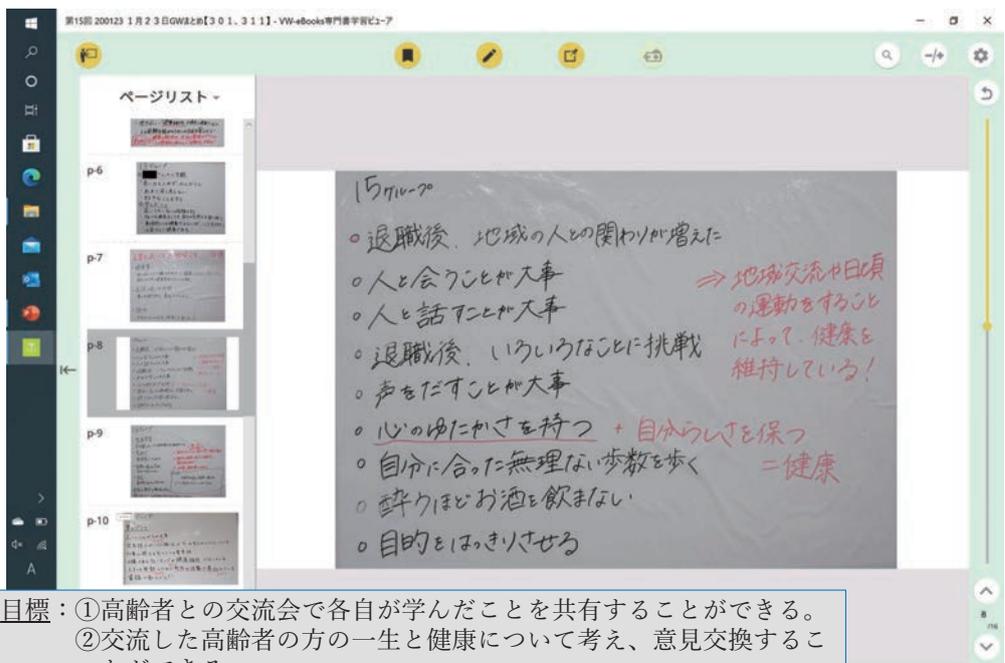
## GWの例

演習室で

ホワイトシートでGW

書記が記入

ホワイトシートを写真に撮って、ビューアに配信  
全学生に共有



- 目標：①高齢者との交流会で各自が学んだことを共有することができる。  
②交流した高齢者の方の一生と健康について考え、意見交換することができる。  
③グループワークの成果を整理してまとめ、発表することができる。

## 2020年度コロナ禍での大学の方針に対応

	4月	5月	6月	7月	8月
大学の方針	Teams、Zoomによる授業準備 学生の準備 Moodleの導入	ネット環境に負荷をかけない工夫、ミュート、ビデオオフ	大きなトラブルなし、ミュート解除可能か？ビデオオン可能か？ 最終試験は来学も可		
2年：援助論Ⅰ	準備期間	Teamsでオンデマンドのビデオを作成して配信 エクセルシートを共有して チャットを使ってGW（エクセルGW）	Teamsでオンデマンドのビデオを作成して配信 TeamsでGWをミュート介助	Teamsでオンデマンドのビデオを作成して配信 Teamsでミュート解除とチャットで、ビデオオフで	Teamsでライブ授業
3年：援助論Ⅱ	準備期間			ZOOMでゲストスピーカーライブ	

## 老年看護援助論Ⅰの概要

ビデオ1  
オリエンテーション資料の解説

**担当教員：**大塚、他3名

**授業日：**木曜日4時限 14：30～16：00 オンデマンド配信（グループワーク  
タイム15：30から20分）

**授業概要：**加齢に伴う変化や健康障害により様々な生活機能の低下や障害を来たしながらも地域で暮らす老年期の人々の理解を基に、要介護高齢者が有する力を引き出しながら日常生活を支援する看護援助について家族支援も含めて学修する

### 到達目標

- [1] 加齢に伴う変化と高齢者の生活機能との関連を説明できる
- [2] ビューアの動画視聴を通して、要介護高齢者の暮らしを支援するための情報収集とアセスメントができる
- [3] 高齢者疑似体験を通して、高齢者の身体機能の低下及び日常生活上の困難さを体験し、要介護高齢者への日常生活の援助方法について説明できる
- [4] 地域に暮らす高齢者の生活に触れ 高齢者の社会参加・ヘルスプロモーションについて説明できる

# 老年看護援助論Ⅰ 授業計画（2年生）

回	月日	授業内容
1	4/30 大塚	オリエンテーション、高齢者のQOLと看護
2	5/7 大塚	要介護高齢者のアセスメント、ICF（国際生活機能分類）
3	5/14 大塚	要介護高齢者のアセスメント：個人因子
4	5/21 大塚	要介護高齢者のアセスメント：環境因子
5	5/28 大塚	要介護高齢者のアセスメント：健康状態、心身機能・身体構造の加齢現象
6	6/4 大塚	動き（歩く、立ちあがる、座る、横になる、移乗）のアセスメントと看護
7	6/11 出貝	聴覚機能、視覚機能、精神機能、コミュニケーションのアセスメントと看護

回	月日	授業内容
8	6/11 出貝	清潔・整容と衣生活、睡眠・休息と活動のアセスメントと看護
9	6/18 徳永	食生活のアセスメントと看護
10	7/2 成澤	排泄のアセスメントと看護
11	7/9 大塚	社会参加、ヘルスプロモーション
12	7/16 大塚	介護家族のアセスメントと支援
13	7/23 大塚	要介護高齢者の暮らしの理解と支援のまとめミニテスト
14	7/30	高齢者疑似体験の自己学習
15	8/6	高齢者疑似体験の自己学習

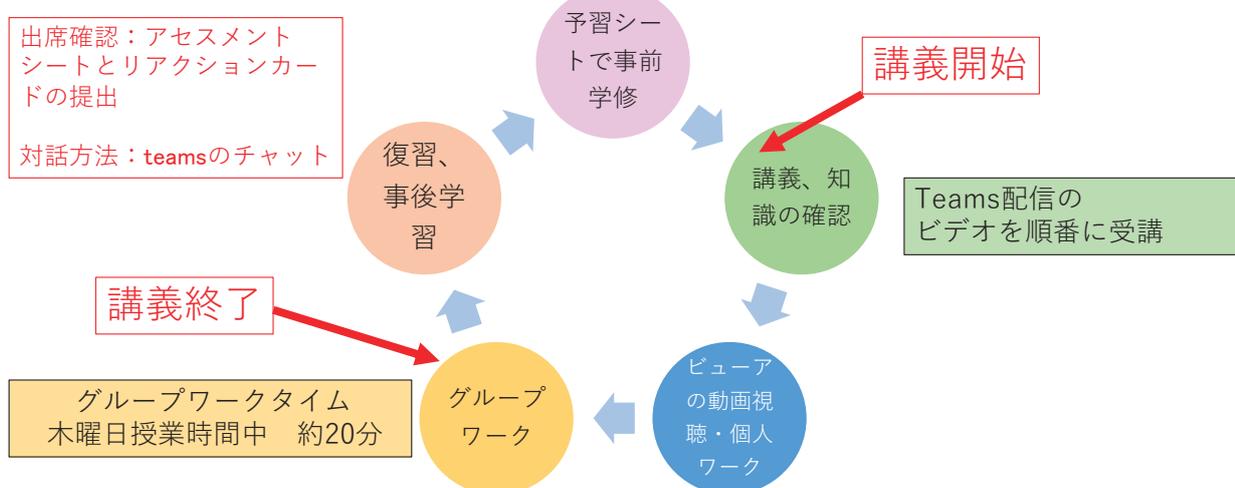
※詳しくは、オリエンテーション資料参照



## 1 コマの学修サイクル

第1回ビデオ1  
オリエンテーション資料の解説

予習 → 講義視聴・個人ワーク・グループワーク → 復習のサイクル



第1回ビデオ3  
教科書の活用：知識の確認

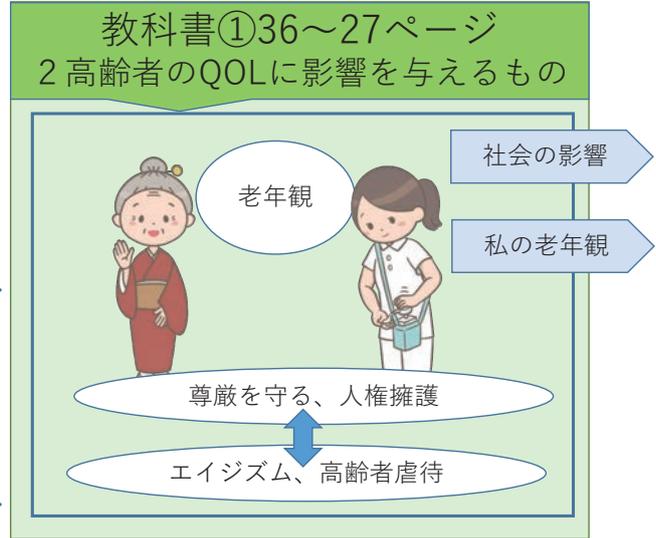
# 高齢者のQOLの特徴1

教科書①34～36ページ  
1 高齢にとってのQOL

予習シート

2. WHO（世界保健機関）はQOLを、「個人が生活する（文化）や（価値観）の中で、目標や期待、基準および関心にかかわる自分自身の人生の状況についての認識」と定義づけている（1998年9月）。  
本人の主観に

3. 高齢者のための国連原則（1991年）では、高齢者のあり方として、①（自立）②（参加）③（ケア）④（自己実現）⑤（尊厳）が挙げられており、これらは高齢者のQOLの要素であると考えられる。  
重要概念



# 個人のアセスメントシート

第1回ビデオ4

1. スライド視聴した感想

②ビューアの動画を視聴する

③動画の感想を入力

2. 私たちが目指したい要介護高齢者の看護

④私が目指したい要介護高齢者の看護を入力

①エクセルの本日のテーマシートを開く

QOLと看護 | 個人因子 | 環境因子 | 心身機能身体構造 | 健康状態 | 活動・参加 | 食事のアセスメント

# 個人ワークシートとGWのためのシート

### 個人ワークシート

エクセルGWのシート、エクセルで作成し、各回のシートを下記から選んで記入

### グループワークシート 15時20分～15時50分

グループワークシートではグループメンバーが自由に記入できるチャット機能もある

Onedrive上にグループのアセスメントシートを作成しており、学生がこのURLをクイックするとグループワークシートに飛べる

全グループの書き込み内容を見ることができる

## エクセルGWの例示①

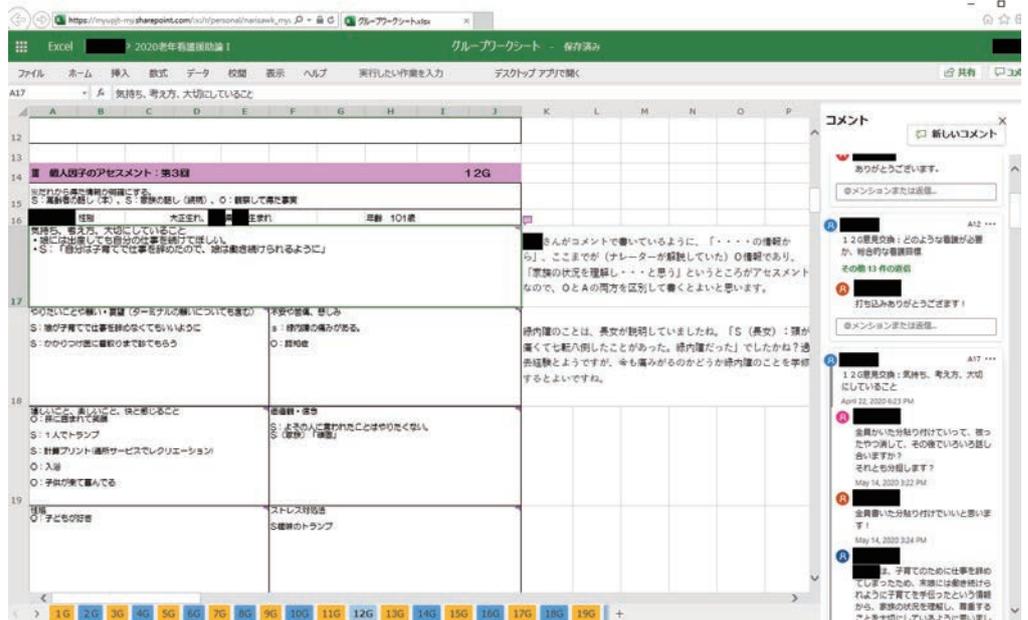
チャットでグループワークの進め方を話し合っている

個人因子のアセスメントとして、動画から読み取った情報をS,Oで記入している

# エクセル GWの例示

②

グループワークの記述に教員がコメント



## 第2回のリアクションカードのコメントや教員のGWの観察から、エクセルGWの方法を整理

- ▶ チャットでの話し合いはタイミングや間合いが難しい
- ▶ やはりチャットに慣れず難しかった
- ▶ なかなかコメントが更新されず難しかった
- ▶ タイムラグがあるのでなかなかスムーズに意見交換ができなかった

- ◆ 充実したGWだったというGのいいところ
  - ▶ **ファシリテーター（リーダー）**がいる；みんな集まった？「いるよ、始めよう。どんな感じに進める？」それぞれ考えを書こう、そうだね。みんなの意見をまとめると〇〇ということかな？
  - ▶ **時間管理**をしている；そろそろまとめよう、次は2に入ろう、次の授業があるから退室します「了解！」
  - ▶ **対話**をしている；意見「応答」、質問「応答」
  - ▶ **情緒的サポート**をしている；いいね、ありがとう、それもらった、

④ ネット環境やPC容量などの限界があるので、現状を受け入れて、それぞれの環境に配慮して取り組もう

- エクセルGWのルール；基本は対面と同じ
- ① 時間厳守（チェックイン、チェックアウト）
  - ② 役割を名乗りでよう、「今日は私がファシリテーターやります」「私がまとめを書くね」
  - ③ 役割を果たそう
    - ファシリテーター；GWの進行、目標の確認、時間管理、メンバーの発言を誘発
    - メンバー；積極的な対話、情緒的サポート

自分のwi-fi環境が悪いこと、パソコンの送受信速度が遅いことをメンバーに知ってもらうことも大事

# 今までの授業を振り返って

## エクセルGWの成果

- ▶ エクセルのGWシートの書き方に慣れてきている
- ▶ エクセルGWの進め方が上手になっている
- ▶ チャットの書き込みでは、具体的な情報をもとにアセスメントがかけている学生さんもある

## 課題となっていること

- ▶ エクセルにまだまだ慣れない
- ▶ 書き込みにタイムラグが生じる
- ▶ 大勢が一斉に書き込むとさらにタイムラグが
- ▶ GWの課題が多く、話し合いの時間が十分とれない

## 映像を用いたアセスメント演習の課題

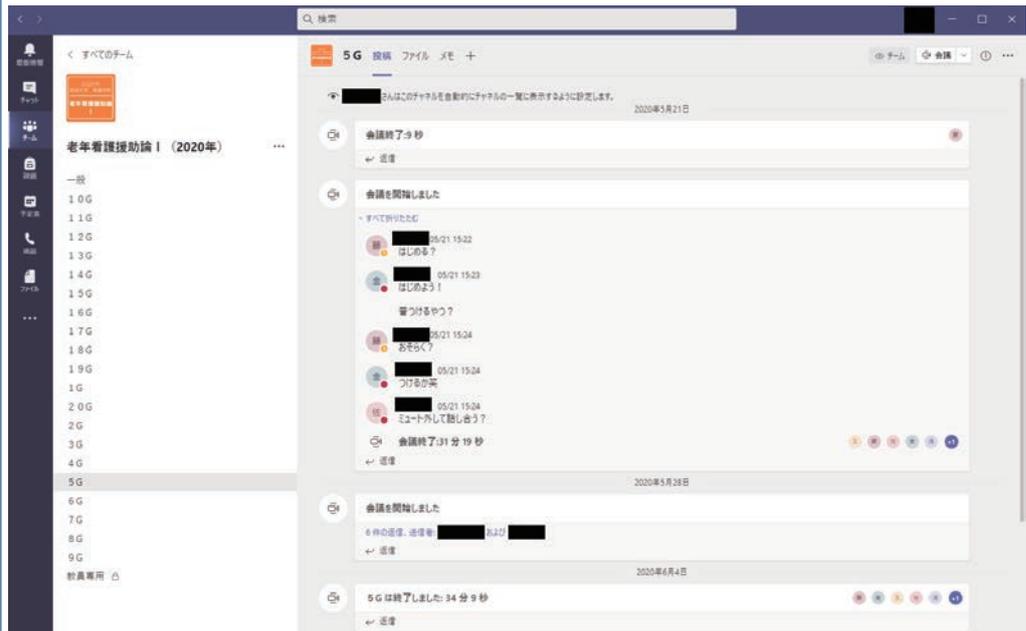
- ▶ 音声の情報、記述情報は具体的にキャッチしているが、その記述に学生の主観的な判断が混ざっている
- ▶ 場面の状況や人の状態を観察した記述が少ない、具体的な記述ではなく、判断として書かれている
- ▶ S情報、O情報を根拠にアセスメントする練習が必要

## 第4回の実施方法

- ◆ エクセルの会議チャットの代わりに、teamsに20Gのチャンネル作成、グループ毎に直接会話
- ◆ GWの課題を絞り込み、GWシートの書き込みはアセスメントのみとする

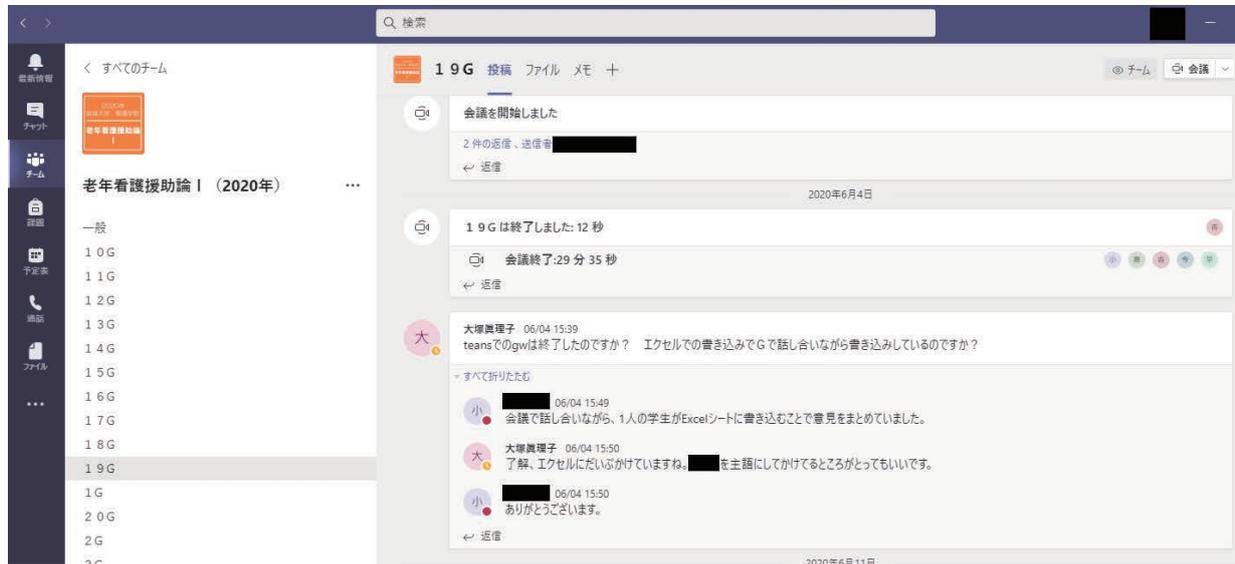
## TeamsのGW

学生同士のやりとり  
はじめはチャットから、ミュート解除で話し合い

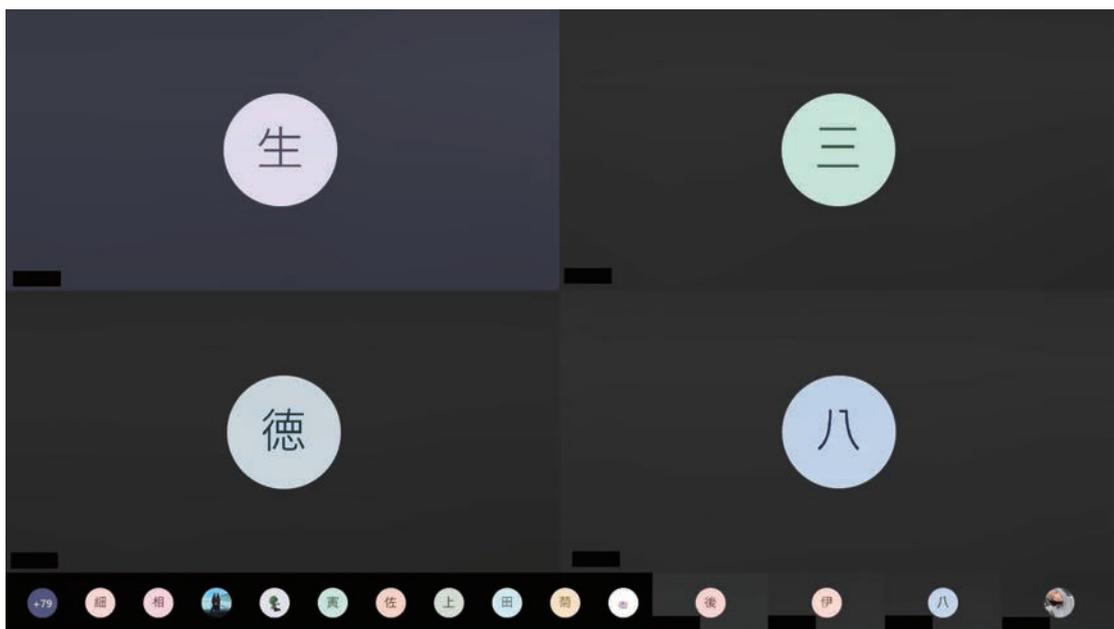


# TeamsのGW

教員と学生のやりとり



# TeamsのGW ビデオオフ



## TeamsによるGW(音声)の成果と課題

### 第4回の実施方法

- ◆ エクセルの会議チャットの代わりに、teamsに20Gのチャンネル作成、グループ毎に直接会話
- ◆ GWの課題を絞り込み、GWシートの書き込みはアセスメントのみとする

### 第5回の実施方法

- 復習、予習を行って主体的にGWに参加する
- GWのルールとプロセス(第3回のビデオ)を見直して、守る
- 音声・映像・teamsのチャットもGで工夫する
- **しかし：音声や映像による心理的影響もある**。映像の背景は壁紙を使う、映像は切るなどの選択も
- トラブルは“その時に”教員に連絡する
- 各自Wi-Fiやパソコン環境がわかってきたので各自で対応する

- 多くのチームでは円滑なGWとなった
- Teamsのチャットを活用したGもあった
- 十分話し合い、アセスメントを書き上げ時間が余ったGもあり⇒他のGシート閲覧へ
- 沈黙が長く、時間が足りなくなったG
- エクセルチャットの方が話し合えたG
- グループシートへの書き込みができなかったG

エクセルGWも、音声によるGWも、対面で直接やり取りするGWも、

**GWのルール、注意点は同じ**

## TeamsのGWの方法を整理

### ◆ 充実したGWだったというGのいいところ

- **ファシリテーター(リーダー)がいる**；みんな集まった？いるよ、始めよう。どんな感じに進める？それぞれ考えを書こう、そうだね。みんなの意見をまとめると〇〇ということかな？
- **時間管理をしている**；そろそろまとめよう、次は2に入ろう、次の授業があるから退室します了解！
- **対話をしている**；意見応答、質問応答
- **情緒的サポートをしている**；いいね、ありがとう、それもらった、

TeamsのGWのルール；エクセルGW、対面と同じ

- ①時間厳守(チェックイン、チェックアウト)
- ②役割を名乗りでよう、「今日は私がファシリテーターやります」「私がまとめを書くな」
- ③役割を果たそう

ファシリテーター；GWの進行、目標の確認、時間管理、メンバーの発言を誘発  
メンバー；積極的な対話、情緒的サポート

## 老年看護援助論Ⅰの評価

### ◆ミニテスト（30%）

予習シート及び教科書の解説内容のビデオから問題作成

### ◆要介護高齢者の看護に必要な情報収集とアセスメント（40%）

要介護高齢者の看護に必要な情報収集とアセスメントのルーブリック評価<到達目標「2」の達成>ビューアの動画視聴を通して、要介護高齢者の暮らしを支援するための情報収集とアセスメントができています。

\* 到達目標は達成できたと評価している

### ◆高齢者疑似体験課題レポート（30%）

## 取り組みの評価

- 事前事後学修、オンデマンドの講義視聴は90分の授業中でも、自分の自由な時の視聴でも可能であり、90分授業の30分のライブグループワークは、学生同士の交流の機会として有効であった
- 毎回のリアクションカードを分析して、運営方法の修正を行い、毎回のビデオは、ビデオ1が前回の振り返り、ビデオ2が知識の提供と定着した
- 5回目以降はリアクションカードにGWへのコメントがほとんどなくなり、学修手段としてのICTを使ったGWが定着した
- 対面でも、チャットでも、音声のみでも、GWのルールや対応は同じと指導したが、むしろ相手の反応がわからず不安であるからこそ、意識してGWの方法を使ったと考えられ、学生のGW能力は高まったと評価できる
- 教員のGW参加、提出物のフィードバック、リアクションカードのフィードバックなど、学生と教員の双方向のやりとりの影響もあった

## 対面授業が可能になる今後の課題

- コロナ禍で、学生が来学できず、全学的にリモート授業となったことによる、ICTを使ったGWは、一定の成果が得られた
- しかし、対面授業が可能となった時に、同じような授業展開はできない
- 3密を避け、マスク着用という学修環境、あるいは今後模索されていく新しい生活様式に対応して、ICTを活用して授業の組み立てを工夫していく必要がある
- 学修ツールとしてのグループワークは、今回の学生の反応をふまえ、対面もICTを使っても可能であり、学修環境や学生のレディネスに合わせ、運営方法や指導方法を工夫する必要がある

# ICTを活用した シミュレーションラーニングの実際

東京医科大学医学部看護学科  
阿部幸恵



## 本日の内容

1. シミュレーション教育とは
2. ICTを活用したシミュレーションラーニングの実際

## 1. 実践力を育む一つの方法； シミュレーション教育

実際の臨床現場を模擬的な状況で再現した中で学習者としての個人やチームが医療を経験し、その経験に基づいて、最善の医療を実践するにはどのような専門的な知識・技術・態度を備えていなければならないのかを学習者同士のディスカッションを中心に、関連資料を活用したり、指導者からのフィードバックを参考にしながら医療者としての能力を向上していく教育。

### シミュレーション教育はアクティブラーニング

アクティブラーニングとは、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

溝上慎一 (2014).

アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂より

## アクティブラーニング型授業の様々な技法と戦略

タイプ	タイプ0	タイプ1	タイプ2	タイプ3
形態	受動的学習	能動的学習	能動的学習	能動的学習
主導形態	教員主導型	教員主導・講義中心型	教員主導・講義中心型	学生主導型
ALとしての戦略性	—	低	中～高	高
技法戦略	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し方</li> <li>・板書の仕方</li> <li>・パワーポイントの見せ方</li> <li>・実物やモデルによる提示など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コメントシート</li> <li>・小レポート/小テスト</li> <li>・宿題</li> <li>・クリッカー</li> <li>・授業通信など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ディスカッション</li> <li>・プレゼンテーション</li> <li>・体験学習など</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">シミュレーション学習</div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・協同学習</li> <li>・調べ学習</li> <li>・ディベート</li> <li>・話し合い学習法</li> <li>PBL・TBLなど</li> </ul>

溝上慎一. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. 東信堂, P7より改変

## 土台となる理論

コルブの経験学習理論

観察学習理論

## 2. シミュレーション教育の3つの種類

- 1) タスク・トレーニング
- 2) アルゴリズム・ベースド・トレーニング
- 3) シチュエーション・ベースド・トレーニング

### タスク・アルゴリズムトレーニングでの シミュレーション教育の流れ

個人で事前学習・練習 (e-learningや動画の利用)

オリエンテーション・ブリーフィング  
(導入: 目標の確認)

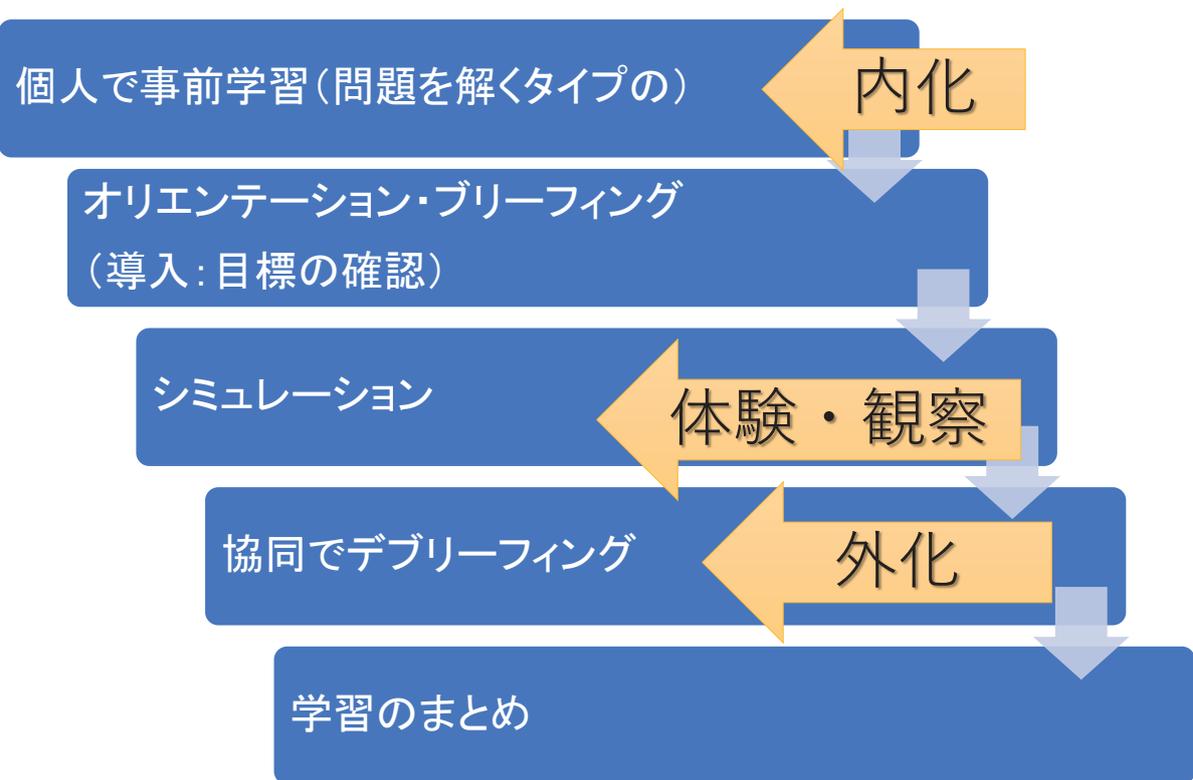
シミュレーション (学生個々が反復)

反復練習

フィードバック

評価

## シチュエーショントレーニングでの シミュレーション教育の流れ

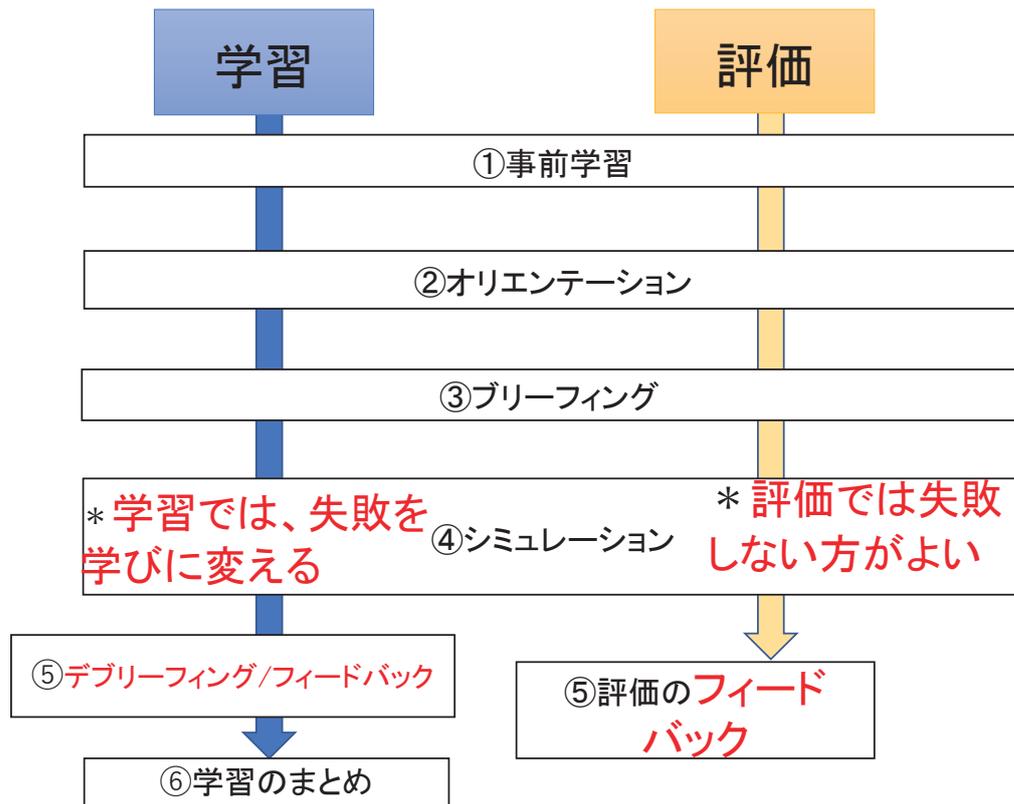


## Debriefingがシミュレーション教育の最も 重要な部分



シミュレーション後には、学習者が行ったことや、起きたこととその原因を捉えられるためには深い議論が必要。学習者がシミュレーションからどれだけのことを学び、自分のものにできるかは、デブリーフィングの効果にかかっている。

## シミュレーション教育2つの側面



### 3. シミュレーション教育での忠実度 現実をどの程度忠実に表現したか。

#### 重要なこと

「シミュレーション教育はシミュレータ教育ではない！」

## シミュレーション教育は有効な一つのツール！



### 【大切なこと】

- ・万能ではない。
- ・シミュレーションを行うことが目標ではない。
- ・正しい指導方法で実施してこそ、効果あり。
- ・シミュレータ教育ではない。
- ・思考過程を可視化するよい方法
- ・シミュレーションでの学びの成果を臨床で応用する・つなげる支援が重要！

## 4. ICTを活用した シミュレーションラーニングの実際

## 1) 演習の代替

Zoomで、原理原則を視る・考える！

テーマ：寝衣交換

(1) 事前学習

(2) 寝衣交換動画(シミュレーション)

(3) デブリーフィング(よかった点、改善点等)

2)3)を繰り返し、手順や留意点を  
ブレイクアウトでグループになりでディス  
カッション

(4) 教員のまとめ

## 2) VRを使って患者の療養環境を観察 シャドウイングの代替

### 【目標】

患者の状態を把握する

患者の病床環境を観察できる。

課題① 2人の患者さんの患者基礎情報を読んで、患者さんと病床をイメージした  
後で、患者さんたちのベッドサイトに行ってみましょう。

シミュレーション：学生の視点で。

デブリーフィング：学生の視点でまとめる。

課題② 看護師のシャドウイングをする。

デブリーフィング：看護師の視点を考える。学生との違い。

### 3) 対面とオンラインを組み合わせた 統合実習

#### 到達目標

- 1) 知識、技術、態度を自律的に統合した活動ができる。
- 2) 実習(学内シミュレーション)における活動を考察し、まとめることができる。
- 3) 自身の学習課題に関する今後の展望を述べることができる。

#### 実習の流れ

1週目: 患者A

2週目: 患者B

### 実習の流れ

1日目から4日目 患者1受け持ち

5日目 患者1退院指導、患者2入院

6日目から9日目 患者2受け持ち 術前から術後

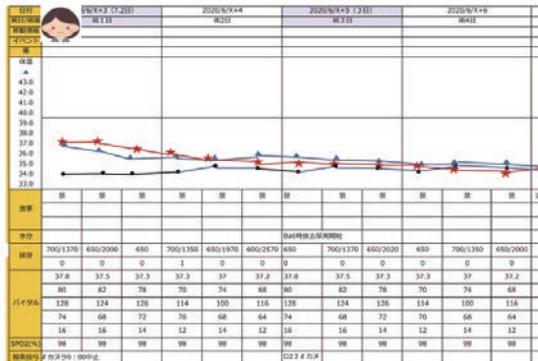
10日目 患者2退院指導

# 自宅・個人で

E-learningで情報を取り記録をまとめる。  
プレゼンテーションできるようにする。

翌日の行動計画を立案する。  
直接患者さんから収集する情報を  
まとめておく。

必要であれば、疾患・フィジカル  
イグザミネーションを復習しておく。



## 5F 南 病棟

号 大野涼子 SO年5月21日 (57歳) □男

主治医 医師 受け持ち看護師 中野

入院時 身長160cm/体重55kg

	指示	備考
安静度	オベ当日: ベッド上安静, 翌日診察後: 離床可	
食事	オベ後1~禁飲食(食可) 6/ X+5日 昼から流動食開始, 以降1日ずつ食上げ	
清潔	オベ後1日目: 清拭のみ, オベ後2日目: 洗髪・足浴可	
不眠時	①アタラクシスP25mg1A+生理食塩水100ml ②夜寧開始後→ゾロキシド1錠	
発熱・体温計 (2回) 38℃以上	①ロキソニンA+生食100ml 100/1h ②ロキソニンA 50 mg/回 1 6 時間おけて 1日3回まで ③ Tylenol 325mg 1錠 1日3回 1時間おけて 1日3回まで	

## 検査所見

項目名	結果	単位
総蛋白 (TP)	7.0	g/dL
	2.8	g/dL
	0.31	mg/dL
	0.63	mg/dL
	22	U/L
	16	U/L
	111	mg/dL
	96	mg/dL
	16	mg/dL
	1.0	mg/dL
	134	mg/dL
	4.1	mg/dL

## 注射箋

氏名: 大野 涼子様 SO年5月21日生 57歳

薬剤・投与量・速度 ( / h ) ・投与方法	サイン
6月 X+2日 朝~オベ入室まで 点滴 末梢メイン ソルラクト 500mL × 1本 60mL/h	ダブルチェック
6月 X+2日 オベ後~24:00まで 点滴 末梢メイン ソルラクト 500mL × 2本 80mL/h 術前 セファメジン 0.5g + 生食 100ml 1時間	
6月 X+3日 0:00~24:00 点滴 末梢メイン ソルラクト 500mL × 4/日 80mL/h 術前 セファメジン 0.5g + 生食 100ml 1時間で 1日3回8時間ごと	

# 学内で実習

1. 夜勤者からの申し送りを受けて、直接収集する情報を整理する。
2. シミュレーションで観察
3. 情報整理・プレゼンテーション
4. ケアの立案
5. ケアの実施
6. 自宅で記録をまとめる。

## 【まとめ】

- ・ディプロマポリシーとのつながりから科目の目標を確認。
- ・対面でしかできない目標とシミュレーションなど代替できる目標を明確にする。
- ・代替えの授業の目標を立案する。
- ・目標に沿って教材を開発する。→重要となるID理論！
- ・評価方法と対面でしかできない目標の達成の仕方を考える。

- ・学習者が主体的になる重要な3つ

ひらめ  
き

ときめ  
き

やるき



## 「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う対応について」の解説

2020年10月

文部科学省 高等教育局 医学教育課  
看護教育専門官 高橋良幸



### 保健師助産師看護師国家試験受験資格取得に関わる法令

- 受験資格(保健師助産師看護師法)
  - 看護師国家試験は、次の各号のいずれかに該当する者でなければ、これを受けることが出来ない。(第21条)
    1. 文部科学省令・厚生労働省令で定める基準に適合するものとして、文部科学大臣の指定した学校教育法に基づく大学において看護師になるのに必要な学科を修めて卒業した者  
※保健師、助産師においては学科を1年以上の学科を修めた者(19条20条)
- 学校又は養成所の指定(保健師助産師看護師法施行令)
  - 行政庁は、(略)法第21条第1号に規定する大学(略)の指定を行う場合には、入学又は入所の資格、修業年限、教育の内容その他の事項に関し主務省令で定める基準に従い、行うものとする(第11条)
- 保健師助産師看護師学校養成所指定規則
  - (前略) 文部科学大臣が指定する大学(中略)の指定に関しては、保健師助産師看護師法施行令に定めるもののほか、この省令の定めるところによる(第1条)
  - 看護師学校養成所の指定基準(第4条)
    3. 教育内容は別表三に定めるもの以上であること
    9. 別表三に掲げる実習を行うのに適当な施設を実習施設として利用することができること及び当該実習について適当な実習指導者の指導が行われること

## 大学設置基準 第6章 教育課程

- 第21条（単位）
  1. 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする
  2. 前項の単位数を定めるに当たっては、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする
    1. 講義及び演習については15時間から30時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする
    2. 実験、実習及び実技については、30時間から45時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもって1単位とする（後略）
    3. （2以上の方法の併用による行う場合）
- 第22条（1年間の授業期間）
  - 1年間の授業を行う期間は、定期試験等の期間を含め、35週にわたることを原則とする
- 第23条（各授業科目の授業期間）
  - 各授業科目の授業は、10週又は15週にわたる期間を単位として行うものとする。ただし、教育上必要があり、かつ、十分な教育効果をあげることができると認められる場合は、この限りでない

3

## 大学設置基準 第7章 卒業の要件等

- 第27条（単位の授与）
  - 大学は、一の授業科目を履修した学生に対しては、試験の上単位を与えるものとする。ただし、第21条第3項の授業科目（卒業論文、卒業研究、卒業制作等）については大学が定める適切な方法により学修の成果を評価して単位を与えることができる
- 第32条（卒業の要件）
  1. 卒業の要件は、大学に4年以上在学し、124単位以上を修得することとする

4

## 令和2年 新型コロナウイルス感染症に関連した連絡事項のまとめ

(文) 文部科学省  
(厚) 厚生労働省  
(総) 総務省

- 1月24日 教育委員会や大学等に対し、手洗い等の感染対策を含めた注意喚起の事務連絡(文)
- 1月28日 教育委員会や大学等に対し、感染症にかかった児童生徒等への出席停止の扱い等について事務連絡(文)
- 2月18日 教育委員会や大学等に対し①学校における臨時休業の考え方②発熱等の風邪の症状がみられる時には自宅休養するなどの感染症対策について事務連絡(文)
- 2月25日 教育委員会や大学等に対し①学校における出席停止や臨時休業等の考え方②学校の卒業式・入学式等の開催に関する考え方について事務連絡(第2報)(文)
- 2月28日 **新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について事務連絡(文・厚)**
- 3月26日 教育委員会や大学等に対して新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けて家計が急変した学生等への支援等について(文)
- 4月3日 電気通信事業者関連4団体に対して、学生等が自宅等において遠隔授業等を活用して学習をするための通信環境の確保に関し、携帯電話の通信容量制限等について、柔軟な措置を講ずること等を要請(総)
- 4月7日 緊急事態宣言(7都府県) 5月6日まで外出自粛要請
- 4月16日 緊急事態宣言(全都道府県) 5月6日まで外出自粛要請  
特定警戒地区として都道府県として13都道府県を指定
- 4月20日 大学等における遠隔授業の環境構築の加速による学修機会の確保(文)
- 4月23日 「新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について」調査結果<sup>5</sup>を公表(文)

- 4月24日 平成30年改正著作権法による授業目的公衆送信保証金制度を4月28日から施行令和2年度補償金無償化(文)
- 4月30日 教育委員会や大学等に対して新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等に対する経済的支援について依頼(文) 利用可能な支援制度の周知
- 5月1日 大学等に対して、遠隔授業等の面接授業以外の実施に係る留意点や実習等の弾力的な取扱いについて(文)
- 5月4日 緊急事態措置の実施期間を5月31日まで延長(全都道府県)  
14日 緊急事態宣言の区域変更 39県を解除
- 5月15日 大学等に対して新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等における教育研究活動の実施に際しての留意事項等について(周知)(文)
- 5月21日 緊急事態宣言の区域変更 3府県を解除 継続区域:北海道、埼玉県、千葉県、東京都  
25日 全面解除
- 5月27日 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況について、調査結果を公表(文)
- 6月1日 **医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設における、実習の弾力的な取扱い等について事務連絡(文・厚)(2月28日の更新版)**
- 6月22日 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について事務連絡(厚)
- 7月27日 本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について(文)
- 9月15日 大学における本年度後期の授業の実施と新型コロナウイルス感染症の感染防止対策について(周知)事務連絡(文)
- 9月15日 「大学等における後期授業の実施方針の調査について」結果公表(文)

6

## 2月28日・6月1日 事務連絡内容

### 1. 学校養成所等の運営に係る取扱い

(1) 学校養成所等にあつては、新型コロナウイルス感染症の対応等により、実習中止、休講等の影響を受けた学生等と影響を受けていない学生等の間に、修学の差が生じることがないように配慮するとともに学生等に対して十分な説明を行うこと

(3) 学校養成所等にあつては、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の変更が必要となることが想定される。実習施設を変更する際には、あらかじめ当該変更に係る承認を受けることとされているが、今般の新型コロナウイルス感染症を受け迅速な対応が必要であることに鑑み、承認申請に係る時期については弾力的に取り扱って差し支えないこと

実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと。その際、学校養成所等は学生等に対し、代替的な学修の趣旨や狙い、到達目標等について十分に説明するよう留意願いたいこと

(4) 上記(3)の取扱いについては、当面の間、医療関係職種等の国家資格の養成施設として指定する規則に示された実習内容の変更に関する承認申請・届出は不要であるが、今後、実施結果について改めて調査を行うことがあり得るので、しっかりと整理されること

(2)および (5)省略

7

### 2. 受験資格に係る取扱い

(1) 今般の新型コロナウイルス感染症の対応により実習中止、休講等が生じ、授業の実施期間が例年に比べて短縮された場合であっても、当該学校養成所等において必要な単位もしくは時間を履修し、又は当該学校養成所等を必要な単位もしくは時間を履修して卒業（修了）した者については、従来どおり、各医療関係職種等の国家試験の受験資格が認められること

(2) 新型コロナウイルス感染症に関連する実習中止、休講等の対応を受けた学生等は、他の学生等より修業が遅れることが想定される。こうした場合であっても、当該学校養成所等において必要な単位もしくは時間（実習が中止の場合、当該学校養成所等において実習に替わり得る学修として各学校養成所等で配当した単位もしくは時間を含む）を履修し、又は当該学校養成所等を必要な単位もしくは時間（実習が中止の場合、当該学校養成所等において実習に替わり得る学修として各学校養成所等で配当した単位もしくは時間を含む）を履修して卒業（修了）した者については、従来どおり、各医療関係職種等の国家試験の受験資格が認められること

(3) (1)及び(2)の取扱いは、学校養成所等における教育内容の縮減を認めるものではないことから、学校養成所等にあつては、時間割の変更、補講授業、インターネット等を活用した学修、レポート課題の実施等により必要な教育が行われるよう、特段の配慮をお願いしたいこと

8

# 看護学実習ガイドライン（概要）

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告（令和2年3月30日）

原案作成 一般社団法人 日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会  
意見聴取 看護系大学285課程 短期大学17課程 令和2年2月10日～17日

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext\\_00260.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00260.html)

## I. 看護学実習ガイドライン策定の趣旨

策定の位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 学生を含む大学および実習施設にとつての指針であり参照基準である</li> <li>✓ 看護コアカリの看護系人材として求められる基本的な資質・能力の育成に資するものである など</li> </ul>
看護学実習の目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 学士課程で学修した教養科目、専門基礎科目の知識を基盤とし、専門科目として看護の知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適用する能力を修得する授業 など</li> </ul>
大学・実習施設・学生の役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 大学は学生の教育に関する責任を有する。学生の十分な準備状況であることを保証する</li> <li>✓ 実習指導教員は、学生が修得した知識・技術・態度を統合し、看護学実習における対象者に看護ケアを提供することを支援する</li> <li>✓ 実習施設は看護ケア提供の責任を有し、その看護ケアに学生を受け入れ、実習施設の看護ケアの質の維持と学生が学修目標を到達できるよう調整する。学生が看護ケアに参画できる機会を提供する。チームの一員として役割を果たすことができるように調整する</li> <li>✓ 実習指導者等は学生との関係性を構築し、看護学実習に臨む意欲を引き出せるよう支援する。学生の看護ケアを尊重しながら対象者のアセスメントを説明し、適切な看護ケアの技術を示す。看護の実践者としての役割モデルを示す</li> <li>✓ 学生は、看護を提供することを通して、情報収集力、アセスメント力、看護ケアを提供する技術力、対人関係形成力を養う。倫理に関して学修を深める。自己洞察力を強化することを努力し、看護学の理解を深化させる など</li> </ul>

12

## II. 大学と実習施設との連携・協働体制の構築

組織的体制づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 大学は、実習施設から看護学実習に関する承諾書を得て、文部科学省への申請手続きを進めると共に、契約を締結し、連携・協働体制の基盤を形成する</li> <li>✓ 実習施設は実践を基本とする質の高い実習指導となるように、学生が学修するために必要な物品、設備等の実習環境を大学と調整し準備する など</li> </ul>
指導の体制づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 大学は、教員に対して、看護学実習の目的、看護学実習における教員の役割と責任、大学と実習施設との連携・協働体制等について理解し行動できるよう、情報共有あるいはFDの機会をもつ</li> <li>✓ 実習指導教員は医療等の最新の状況を把握して、担当する科目における臨地における実践力を維持・向上させる努力が必要 など</li> </ul>
倫理及び安全管理に関する調整	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 実習のプロセスを通し、対象となる個人・家族等の安全と人権が尊重されること、また学修者である学生の安全と人権も保障されることが重要である</li> <li>✓ 学生に対して看護学実習で対象者へ提供する看護ケアについて、実習前までに看護学基礎教育において学修し、実施の安全性が確認された技術であることを周知するとともに、実習施設と調整することが必要である</li> <li>✓ 大学は、臨地での実習における事故発生時の対応マニュアルを整備し、実習施設と調整すると共に、実習要項に明示して学生に事故予防を周知する。</li> <li>✓ 臨地での実習における災害発生時のマニュアルを整備し、実習指導教員や学生が迅速に対応できるよう実習要項にフローチャート等を明示して、実習施設及び学生に周知する など</li> </ul>

## III. 看護学実習前の調整

実習要項の作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 実習目的、実習目標、実習スケジュール、実習評価方法、感染予防対策、事故予防対策、個人情報保護などの倫理的配慮、災害時の対応を明示した実習要項を作成する など</li> </ul>
実習前打合せ	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 大学は事前会議を主導し、実習目的・目標等を実習施設に説明し、役割分担・責任範囲、評価方法、指導方法の方針、各学生の学修進度、合理的配慮が必要な学生の情報等について共通認識するよう努める など</li> </ul>
レディネス形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 学生は、実習目標を達成するために必要な知識と技術を復習する</li> <li>✓ 実習指導教員は、学生個々のレディネス把握、実習への取り組みの動機づけを行う など</li> </ul>

13

## IV. ケアへの参画における指導方法

大学と実習施設の双方が参照する指導の方針として、実習指導教員と実習指導者等の両者あるいはいずれかが主語として示されている。

看護学実習における指導の方針	✓ 実習指導教員と実習指導者等は、学生の個性のある看護実践能力を身につけられるように支援する など
看護過程に基づくケアの実践	✓ 学生は看護過程に基づき適切な看護ケアを提供することを学修する。 ✓ 実習指導者等は看護ケアの場面でのアセスメントや意図することを学生が理解できるように言葉で表現する など
安全なケア環境の整備	✓ 実習指導者等は、実習開始に際し、学生に実習施設のオリエンテーションを行う。学生は緊張度が高いため、そのことを十分に理解して、実習に導入する ✓ 遭遇したインシデント・アクシデントの原因と再発予防策を考えることは、学生にとっての学修機会となるため、学生が説明できるように実習指導教員及び実習指導者等は支援する など
チームの一員としてのケア参画	✓ 学生は実習指導者等の指導を受けながらケアに参画し報告・連絡・相談を行うことによって協働する。チームの目標、メンバーの役割、自己の役割を理解する など

## V. 評価方法

実習評価項目の設定	✓ 実習指導教員等は各実習科目の目的を設定し、その目的を達成するための学生が到達すべき目標を設定する。到達目標に基づき実習評価項目、達成度を示す基準を設定する など
外部基準の参照による実習評価項目の設定	✓ 全ての看護学実習科目を総括する目的や、各実習科目の目的・目標を評価する実習評価項目の作成に当たっては、これまで以上に質の高い教育となることを意図し、看護コアカリヤや「看護系大学学士課程の臨地実習の基準」を参照し、さらに「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準看護学分野」、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」といった外部基準も積極的に活用する など
到達度に基づく達成度評価	✓ 原則、評価に関する責任は大学が有するが、実習指導者等の意見を可能な限り聴取し評価に反映させる ✓ 評価結果を学生にフィードバックし学生の内省と学修課題を明確にすることを支援する など
看護学実習全体の評価	✓ 学生、実習指導者、実習指導教員による看護学実習の評価結果を、実習施設及び大学による看護学実習のあり方について検討する場を設定する など

14

## 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会

### 1. 目的

大学における看護学教育の更なる充実に向け、専門的事項について検討を行い、必要に応じて報告を取りまとめる。

### 2. 検討事項

(1) 保健師助産師看護師学校養成所指定規則を大学において適用するに当たっての課題と対応策について

(2) その他、大学における看護系人材養成に係る事項について

### 3. 開催状況

全7回

(令和元年5月16日

～令和2年3月9日)

秋山 正子	株式会社ケアーズ代表取締役 白十字訪問看護ステーション統括所長・認定NPO法人マギーズ東京センター長
井村 真澄	日本赤十字看護大学看護学部母性看護学/看護学研究科国際保健助産学専攻研究科長・教授(公益社団法人全国助産師教育協議会会長)
大島 弓子	豊橋創造大学保健医療学部・大学院健康科学研究科 看護学科長・教授(一般社団法人日本私立看護系大学協会会長)
岡島 さおり	公益社団法人日本看護協会常任理事
(川本 利恵子)	公益社団法人日本看護協会常任理事 ※第1回まで)
鎌倉 やよい	日本赤十字豊田看護大学学長(一般社団法人日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会委員長 ※第4回より)
釜范 敏	公益社団法人日本医師会常任理事
上泉 和子	青森県立保健大学学長(一般社団法人日本看護系大学協議会代表理事)
岸 恵美子	東邦大学看護学部・大学院看護学研究科教授(一般社団法人全国保健師教育機関協議会会長)
小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院副院長・看護部長
鈴木 克明	熊本大学教授システム学研究センター長・教授
◎ 高田 邦昭	群馬県立県民健康科学大学学長
中根 直子	日本赤十字社医療センター周産母子・小児センター副センター長・看護副部長(※第4回より)
彦根 倫子	神奈川県平塚保健福祉事務所保健福祉部長・地域統括保健師(※第4回より)
平野 かよ子	宮崎県立看護大学学長(一般社団法人公立大学協会看護・保健医療部会会員)
○ 宮崎 美砂子	千葉大学副学長・大学院看護学研究科教授
柳田 俊彦	宮崎大学医学部看護学科教授

計17名

<オブザーバー>

島田 陽子 厚生労働省医政局看護課長

※50音順・敬称略

15

# 看護系大学の教職員の皆様へ (令和2年9月9日事務連絡内容より)

文部科学省では、医療系学部において、**薬害防止に関する教育**がなされるよう  
 お願いしております。

特に、学生だけでなく教職員を含め、**薬害被害にあわれた方の意見・体験等を  
 直接聞く機会を設け、適切な医療倫理・人権学習等の授業や、複数回にわたり  
 様々な薬害被害者の声を聞き、再発防止について議論をする授業等を積極的に実  
 施されるよう御検討願います。**

薬害問題に対する各大学の取組状況 (%)

令和2年度調査	看護学部	医学部	薬学部	
薬害被害に ついて学ぶ 授業	実施している	86%	98.8%	100%
	検討中	10%	0%	0%
	実施していない	3%	1.2%	0%
薬害被害者 の声を聞く 授業	実施している	22%	60%	81%
	検討中	28%	17%	2%
	実施していない	49%	22%	15%

授業や職員研修等  
 の実施に当たって、全国薬害被害者団  
 体連絡協議会に講  
 師派遣の御協力を  
 いただけます。

講師派遣窓口  
 yakuhiren.lecturer  
 @gmail.com

ご視聴ありがとうございました。

看護学教育支援における ICT 活用の可能性

# < グループワーク >

看護学教育研究共同利用拠点  
令和2年度看護学教育ワークショップ

## 8 . 全プログラム参加者グループ別名簿

担当	国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
Aグループ 和住 高木	国	秋田大学	大学院医学研究科 看護学講座	准教授	秋田	2001	眞壁 幸子
	私	国際医療福祉大学	大田原キャンパス	准教授	栃木	1995	荒川 博美
	公	富山県立大学	看護学部看護学科	教授	富山	2019	松井 弘美
	私	日本赤十字豊田看護大学	看護学部看護学科	准教授	愛知	2004	南谷 志野
	国	宮崎大学	医学部看護学科	准教授	宮崎	2000	大川 百合子
Bグループ 野地	公	札幌医科大学	保健医療学部看護学科	教授	北海道	1993	正岡 経子
	公	岐阜県立看護大学	熟成期看護学領域	准教授	岐阜	2000	布施 恵子
	国	山口大学	医学部保健学科 看護学専攻	准教授	山口	2000	生田 奈美可
	私	摂南大学	看護学部看護学科	准教授	大阪	2012	佐久間 タ美子
	私	東都大学	ヒューマンケア学部看護学科	准教授	埼玉	2009	中村 織恵
Cグループ 黒田	国	群馬大学	大学院保健学研究科	教授	群馬	1996	近藤 由香
	私	中部大学	生命健康科学部保健看護学科	准教授	愛知	2006	石井 真
	国	鳥取大学	医学部保健学科 看護学専攻	准教授	鳥取	1999	三好 陽子
	公	宮崎県立看護大学	看護学部看護学科	准教授	宮崎	1997	矢野 朋実
	私	茨城キリスト教大学	看護学部看護学科	准教授	茨城	2003	原島 利恵
Dグループ 銭	国	香川大学	医学部看護学科	教授	香川	1996	松本 啓子
	私	久留米大学	医学部看護学科	准教授	福岡	1994	舞弓 京子
	私	創価大学	看護学部看護学科	准教授	東京	2013	藤田 美江
	公	埼玉県立大学	保健医療福祉学部看護学科	准教授	埼玉	1999	東原 亜希子
	公	和歌山県立医科大学	保健看護学部保健看護学科	講師	和歌山	2004	岡本 光代
Eグループ 石橋	公	滋賀県立大学	人間看護学部人間看護学科	准教授	滋賀	2003	大脇 万起子
	国	東京医科歯科大学	医学部保健衛生学科 看護学専攻	教授	東京	1989	佐々木 吉子
	公	横浜市立大学	医学部看護学科	准教授	神奈川	2005	大山 裕美子
	私	国際医療福祉大学	保健医療学部看護学科	教授	栃木	1995	松本 明美
Fグループ 手島	私	日本赤十字広島看護大学	看護学部看護学科	准教授	広島	2000	山本 浩子
	国	岐阜大学	医学部看護学科	准教授	岐阜	2000	社本 生衣
	私	北里大学	看護学部看護学科	准教授	神奈川	1986	中山 栄純
	公	群馬県立県民健康科学大学	看護学部看護学科	教授	群馬	2005	大澤 真奈美
Gグループ 杉田	公	千葉県立保健医療大学	健康科学部看護学科	准教授	千葉	2009	西村 宣子
	私	共立女子大学	看護学部看護学科	教授	東京	2013	田口 理恵
	私	帝京大学	福岡医療技術学部看護学科	准教授	福岡	2014	平井 和明
	国	徳島大学	大学院医歯学研究所	准教授	徳島	1987	千葉 進一

## グループA

真壁幸子（秋田大学）、荒川博美（国際医療福祉大学）、松井弘美（富山県立大学）

南谷志野（日本赤十字豊田看護大学）、大川百合子（宮崎大学）、

ファシリテータ：和住淑子（千葉大学）

グループワークでは、CQI ワークシートを用いて自大学を俯瞰的にとらえなおした上で、自大学の課題や気になっている点を紹介し合った。その後、各大学の置かれた状況や立場の多様性を活かし、利害のない協調関係のもとで相互に質問したり、関連する自大学の状況を伝え合うことで、それぞれのもつ課題を多角的かつ客観的にとらえ、課題解決に向けた自らおよび自大学の潜在力に気づくことができた。グループ討議の主な内容は以下のとおりである。

まず、一大学から「新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、対面授業ができなくなったことで、もともと ICT 活用に苦手意識がある自分は、授業の実施に負担感を感じている。周りの教員も、皆、多忙で疲弊しており、「これ以上仕事を増やしたくない」という意識があるようで、なかなか助けてもらうのは難しい。看護の喜びを学生に伝えるような教育が組織としてなかなかできない。」と課題が提示された。

これに対し、「自大学ではこれまで、看護技術演習では学生の前で教員がデモをする、という形態をとってきたが、今回、集合型の演習ができなくなったことで、教員の手元を撮影したデモ動画を作って学生が視聴できるようにした。すると、学生からは、『これまで見えにくかった教員の手元がよく見える』『スロー再生すると看護技術の細部がわかりやすい』など、好評であった。教員も、動画撮影自体は大変だったが、演習中ずっと学生のそばに張り付いている必要がなくなり、かえって時間削減にもなり、結果的に、学生にとっても教員にとっても良かった。」との経験が示された。

また、別の新設大学からは、「設立時から ICT を活用した少人数教育に取り組んでおり、今回の出来事はその意義を実感するものとなった。教員の ICT 活用能力の課題も見えてきたので、組織的な支援策を検討したい。」との経験も提示された。

臨地実習中に発熱した学生が出た経験をもつ大学からは、臨地実習の代替実習についての経験が語られた。代替実習を検討する際にも、普段からの臨地実習施設との連携や、1年次からのカリキュラム内容が重要であることが示された。

さらに、国際交流を担う立場にある教員からは、「今回の新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大によって、何が起ころかわからない世界情勢を踏まえ、単なる英語能力というようなレベルではなく、よりグローバルで多様な国際感覚を磨く新たな教育手法を、ICT を活用して開発していることが語られた。2名の教員で120～130名の学生に看護管理実習を体験させる立場にある教員からは、今後、より ICT も活用しながら、より効率的で効果的な実習体制を立案する必要性や、大学院教育との連動の可能性が提示された。

最後に、指定規則の改正に伴い、各大学ではカリキュラムの見直しが進められる中、学生のための、ポストコロナ時代のカリキュラムを、看護系大学が協働しながら作り上げていく必要性が語られた。

## グループB

正岡経子（札幌医科大学）、布施恵子（岐阜県立看護大学）、  
生田奈美可（山口大学）、佐久間夕美子（摂南大学）、中村織恵（東都大学）  
ファシリテータ：野地有子（千葉大学）

### 現状と課題を踏まえ、自大学でのCQIを推進するうえで必要なこと

#### 1. 教員、学生の疲弊への戦略対策

- 1) 教員間の情報共有、多様な方法への理解
- 2) 教員ひとりひとりの苦闘をかたち→教材化（実習につなげられる）
- 3) 失敗への不安なく実習できたことが今後活かせる成功体験
- 4) 遅れへの不安はあるが、学生の言葉から相互作用による教員のモチベーション
- 5) 学生の疲弊→検温や行動記録の負担があり、正しいことをしているのか評価が見えないので、意味あること見える化する
- 6) 学生の疲弊→コロナ世代と言われるのが怖い→意味を何とか残したい
- 7) 休学者が例年より多い（連絡不十分のケース）

#### 2. 看護教育の質（実習に焦点をあてて）

- 1) 入院経験のある教員が患者役のオンラインで、フィードバックを行った
- 2) 学生が看護師から話を聞く時間をつくった（インタビューガイドを作成）
- 3) 先回り情報で準備し、考える時間の確保ができ、臨床推論を深められる

#### 3. 演習について

- 1) 声での確認は多大なる時間を要する
- 2) 自分が看護する立場の設定で意見活発（技術演習の課題）
- 3) 領域間で感染予防対策の差がみられる
- 4) 学生同士の距離の取り方が難しい
- 5) モデル人形での限界

#### 4. 看護学教育、大学の発展に向けた戦略

- 1) 教育の継続→地域と大学をつなぐ橋渡し
- 2) 臨床とつながった教育→臨床が疲弊しないつながり学習環境を整える（考え方）
- 3) オンライン授業の目的とメリハリのついた方法
- 4) 講座制とヨコのつながり、教員の自覚、教育方法の学び
- 5) 卒業生支援（ICTで全国展開）
- 6) 卒後の大学の利用
- 7) 教員のすべき仕事の明確化→疲弊回避

## グループC

近藤由香（群馬大学）、石井真（中部大学）、三好陽子（鳥取大学）、  
矢野朋実（宮崎県立看護大学）、原島利恵（茨城キリスト教大学）  
ファシリテータ：黒田久美子（千葉大学）

グループCでは、コロナ禍前からの課題として、学生のコミュニケーション能力を高める教育、実習調整などの煩雑な業務による教員の疲弊、教員のICT教育活動の推進、教員間の相互理解の不足、大学の強みをいかした社会貢献などがあげられていた。また、コロナ禍で遠隔授業を何らかの形態で実施した経験をもち、それをふまえて事前課題で自大学の現状分析をすすめていた。

特に、メンバーの一人は、モデル図1で気になっている部分を視点としてあげ、視点ごとに図の中に情報を整理し、オーバービューができる資料にされていた。そのことによって、情報の相互の関係性が把握でき、弱みは強みと表裏一体であり、どのように変換すれば教員間の相互理解を深めて意識改革ができるかを検討するための資料として活用できると総括されており、シートのとてもよい活用例が示された。

グループメンバーからのフィードバックや意見交換では、遠隔授業では学生の反応が思いがけずよかったり、落ち着いて自分の意見を言えていたこと、ICTに後ろ向きだったがかえってチャンスと教員が思えるようになり、今回の実習では出来なかった双方向の形態をICTで出来ないかと考えていること、学生にも教員にもデジタルデバイドはあり、見方を変えると若手の得意な先生が活躍できる機会でもあること、遠隔授業を手探りで行ったが、結果的にその方法が学生にとってはよかったと確認できたことなど、遠隔授業を通じた発見を共有する機会となった。

最後に、今後の取り組みに向けて、以下のような意見が述べられた。

- ・コロナ禍でICT活用が推進されたが、未評価なので全員で共有していく。やってみようという気持ち、楽しくできるような人の巻き込み方を考えていきたい。
- ・学生のコミュニケーションを問題視していたが、学生と自分自身のコミュニケーションを見直していく。学生を信じ、学生から教えられるところもある。ICTについては、学生のレスポンスをみなから工夫をしていく。
- ・改革は領域間を超えないと無理だが、タイムリーな情報共有はICTの得意なところ、また対象者との接点はどこにでもあると考えると実習をもっと柔軟に組み立てられる。学生同士からの学びや、学生が自信をつけることを最初にするなど、また教員同士のコミュニケーション等を遠隔授業で気づいた。
- ・ICT化が課題でありリテラシーを高めると考えていた。楽しくICTをやっていく。自分も楽しく、率先してやってくれる人のモチベーションを下げない。学生に意見をもらい、学生とともによくしていく。仲間を増やす。学生の就職先はすでに電子カルテである現実に基づく。
- ・今までの固定概念を取り除き、ICTを使い、他の領域の人と情報共有してやっていきたい。いかに質の高いコミュニケーションをとるかを考えていきたい。

全体を通して、このたびのコロナ禍での遠隔授業の経験を自大学のもともとの看護学教育の課題につなげてICTの活用可能性を検討でき、楽しくやっっていこうと思えるワークとなった。

## グループD

松本啓子（香川大学）、舞弓京子（久留米大学）、藤田美江（創価大学）、  
東原亜希子（埼玉県立大学）、岡本光代（和歌山県立医科大学）  
ファシリテータ：錢淑君（千葉大学）

### 午前の部の討議内容

- ・〔学生側〕地方大学のため、感染者数が少なく、実習先の確保はできたが、ICTの操作に慣れておらず、IT熟練者による支援が必要となった。双方向の通信が難しい学生に対して、オンデマンド形式で授業を行っている。4月から急なオンライン授業の開始に向けて、学生が慌ててパソコンを準備しなければならなくなったため、大学のパソコンを学生に貸し出すこともあった。
- ・〔教員側：授業〕オンライン授業を展開するための教材作成に時間を要するため支援者が必要となった。ICTを活用し、実習の代替の方法を練り、個人情報保護などの対策を立てていた。リアルタイムとオンデマンドというハイブリッドの形式で授業展開した。オンライン教育を実践してみると、逆に教員不足の問題を補う効果があり、利点となった。
- ・〔教員側：実習〕ソーシャルディスタンス確保のため、学生をより多くのグループに分けて学内演習したところ、毎回メンバーが変わることによりお互いにとって、多様な刺激となった。その反面、教員のいない自己学習の教室には遅刻した学生が途中で帰宅してしまう等、教員のマンパワー不足が露呈する事態も起きた。実際に臨地で実習が行えた場合と、代替実習に振り替えた場合とが混在する現状となった。

### 午後の部の討議内容

- ・今回のようなオンライン授業の機会を活かし、ペーパーペイショントの教材を蓄積していきたい。蓄積した事例を共有し、臨床の実体験の少ない学生にとっては患者の入院から自宅へ退院したあとの生活プロセスについて良い学習の教材になると考えられる。しかし、教材を電子化することによって、学生がコピー・ペーストで課題提出する懸念もあり、学習上の弊害も考慮せねばならない。
- ・実習の代替の方法として、模擬患者を活用したり、劇団の力を借りたりすることもある。このような教材開発作成には看護だけではなく、医学部など他学部の教員も一緒に巻き込んで作成したほうが良い成果につながる。
- ・実習先の附属病院は電子機器が使いこなせているが、地方の在宅看護の施設はメールを使っているのは1割にとどまっている現状もある。オンラインの学習環境整備が進めば、在宅看護にも拡大していきたい。特に県内での実習施設確保が困難な状況のため、県外の遠方な実習施設の場合は、移動による負担の改善につながると考えられる。

## グループE

大脇万起子（滋賀県立大学）、佐々木吉子（東京医科歯科大学）、  
大山裕美子（横浜市立大学）、松本明美（国際医療福祉大学）  
ファシリテータ：石橋みゆき（千葉大学）

### 「ICTを活用し鍛えた思考をどのように臨地実習につなげられるか」

メンバーが普段担当している教育の領域は、クリティカル領域、災害領域、基礎看護学、小児看護学、家族看護学、老年看護学であった。すべての大学が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、今年度より全面的にどの領域においてもICTを活用している状況であった。

最初に、メンバーそれぞれの大学のICTの準備性（ハード面、ソフト面）、どの科目でどのように活用しているのかについて、自己紹介しながら情報交換を行った。臨地実習が当初の計画通りに実施出来た大学はなく、日数が制限される、もしくはすべて中止となった状況があった。また、学内の技術演習についても、同時双方向システムを活用したオンライン形式等で実施している状況であった。

情報共有から見えてきた課題として、「それぞれの領域で実施しているICT活用の教育効果を、どのようにうまく繋いでいけるだろうか」すなわち、つなぐことの課題として2つの側面があると話し合った。一つ目は、他領域との共有や基礎科目と専門科目の連続性を意味するもの、二つ目は、ICTによる個人学習から始まり双方向性のグループ学習（シミュレーション含）から臨地実習へとむかう学びの継続性を意味するものである。とくに、Eグループでは、二つ目の意味に沿って討議を深めた。

まず、臨地実習に向け、今年度新たに導入したICTを活用した学内での技術演習やシミュレーションの利点を話し合った。メンバーからは、実際の看護実践の場を再現したリアルな動画教材を活用し、ケア提供のためのアセスメントとケア計画立案をする学内演習の紹介があった。動画教材を活用した利点として、繰り返し視聴でき、さらに紙面の事例よりも情報量が格段に多いことから、学生にとっては具体的な看護問題を描きやすいことが挙げられた。また、学生同士でケアし合う場面を他の学生が見学し、修正すべき点を指摘しプランを修正して再度実施する等、臨地実習では実現できない、振り返り学習の充実とケアの精錬という利点が挙げられた。

しかしながら、実際の臨地実習は、構造化された場ではないため、ICTを活用して鍛えた思考を、どのように学生は臨地実習に持ち込めるだろうか、という新たな疑問も生じた。また、臨地実習期間が極端に短縮された場合は、どのようにできるかという点で更に検討を進めた。一つの例として、実習前に教員が患者情報を詳細に収集し、学内演習のシナリオを作成する、演じるなどして動画教材を作成し、実習前にシミュレーション教育を実施しておく。実習中、学生の滞在時間が制限されるのであれば、まず、臨地実習では情報収集を中心に行い、一旦その情報を学内に持ち帰り、学生はケア計画を立案する。動画教材を活用し、その患者に応じたケアが実施できるよう技術演習を行ったのち、初日から1日～数日後に患者の予定に合わせて学生がケアを実施する。そして学生は学内にもどりケアの評価を教員や他の学生と行うといった流れが検討された。最終的には、臨地実習の時間が限られていても、ICTを活用して鍛えた思考を臨地実習に持ち込み、実施し、学生は自身のケアについて振り返るといった、臨地と学内それぞれの利点をいかし、教育効果を最大限に高めるようなベストミックスを、各大学の状況に応じて創り上げていくことができるのではないかという結論に至った。

## グループF

山本浩子（日本赤十字広島看護大学）、社本生衣（岐阜大学）、  
中山栄純（北里大学）、大澤真奈美（群馬県立県民健康科学大学）  
ファシリテータ：手島恵（千葉大学）

COVID-19 禍における看護基礎教育における ICT の活用について検討したところ、F グループでは次のような課題が明らかになった。

- 学生の動機付け
- シミュレーションでできることとできないことの見極め
- 教員により ICT の活用能力に差がある
- PC 等の端末の確保
- 課題の出し方

COVID-19 禍により ICT に頼らざるを得なかった状況であったが、この経験をふまえ、ポスト COVID-19 においても ICT をどのように活用できるかについて、各々の大学の取り組みが報告された。教員の ICT 活用能力差に対しては、FD を実施したり、取り組みを発表したりする機会を設けることで教員相互に学ぶ機会を設けることなどが提案された。

シミュレーションで模擬患者を地域で養成し確保している事例が共有されたが、高齢者等が多く、COVID-19 感染拡大による外出自粛のため、現在は協力を得るのが難しい状況にある。保健所の実習ができず、保健師との対応を学ぶことができない状況に対し、退職した保健師の協力を得て実施している事例が報告された。

PC などの端末の確保については、大学によって全員に配布したり、大学で 15 台程度確保したりしていた。今後は、学生のスマホで教材の視聴ができるような教材開発の工夫が求められる。

学生は、COVID-19 禍の中、学習課題に対して誠実に提出しており、普段よりむしろ学習時間を十分確保し、参画していたという意見が多くみられた。例えば、教務委員会などで、課題の出し方（量）について、教員間で一定のルールなどを話し合っておかなければ、学生の負担になる状況も見受けられた。

担任制をとっている大学では、グループ担任が Teams を用いて定期的に面接を実施することで、普段よりむしろ学生との距離が近く感じられているという報告があった。学生は、COVID-19 禍での学修の限界を感じながら卒業することに心理的負担を抱いているので、卒業までに最善を尽くし、対応が必要である。

## グループG

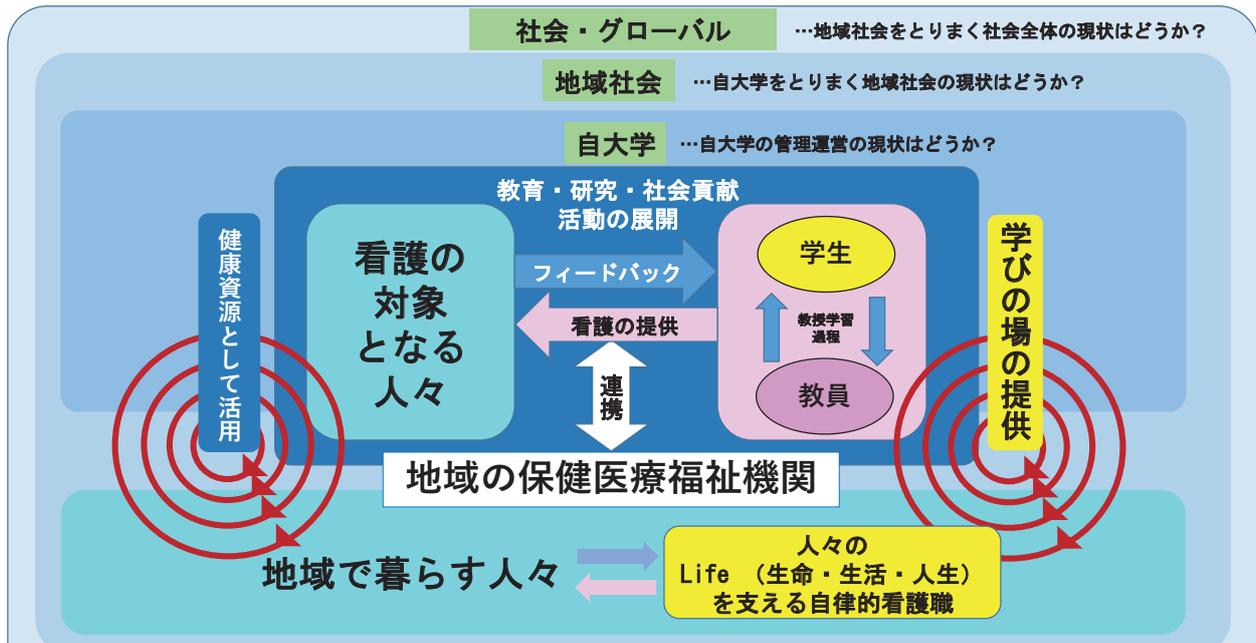
西村宣子（千葉県立保健医療大学）、田口理恵（共立女子大学）、  
平井和明（帝京大学）、千葉進一（徳島大学）  
ファシリテータ：杉田由加里（千葉大学）

### 1. ICT活用に関する自大学の現状と課題について出された意見

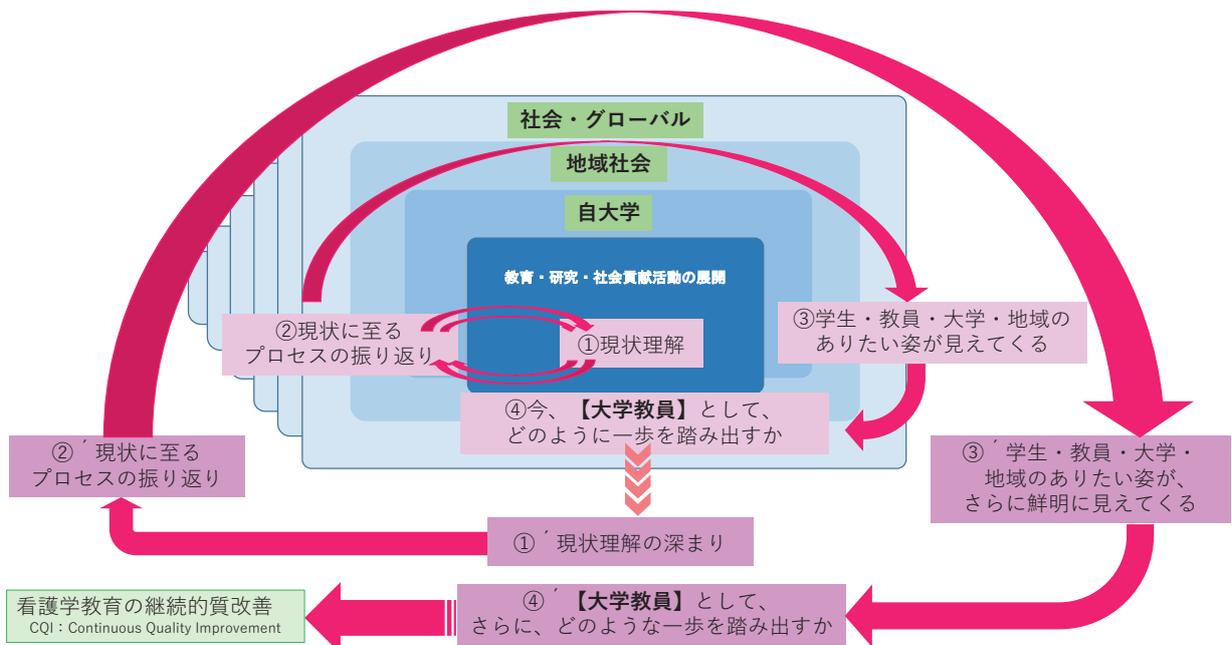
- ・ まずは、学生のネットワーク環境についての調査を実施した。携帯しか所有していない、ネットワーク環境を持っていない学生がいるという実態が明らかとなり、対応策を考えた。
- ・ オンデマンドでは学生が繰り返し視聴できることが可能であり、能動的に参加するので思考する力がつくという点ではWeb授業は活用できるという実感をもった。
- ・ Web授業では課題を提示することが多いので、課題提示方法が様々だとそれを追いかけるだけで学生が辟易してしまう状況もあった。学内でのルール作りが必要と考える。
- ・ 本学ではこれまで予習に課題がありとしていた。Web授業では事前に資料を提示するので効果を期待したいタイミングである。しかし、もともと看護職への志向性が低い学生へは懸念している。
- ・ 教員の中にはICTスキルに苦手意識を抱く者や対面授業が効果的と信じている者もいる。ICTに積極的に取り組むには教員間でのディスカッションが必要だが、時間確保も難しい。
- ・ 教員の中には何でもWeb授業でよいのではと考える教員もおり、リアルとWeb授業と区別できる力をつけること、学内でのコンセンサスが必要と感じている。

### 2. 課題に対する取り組みについての意見

- 1) 教員のICT活用に関する方向性を揃えるにはどのような方法があるか？
  - ・ 教員によって課題の出し方が異なり、学生に負担がかかっているという実態が明らかになったのを機に、各領域での実施方法を紹介するという形で、FDを実施している。
- 2) オンラインに向く科目をどのように考えていったらよいのか？
  - ・ 少しでも実習を経験した4年生へはオンラインでも有効と思えたが、3年生の中には初めから実習を経験していない学生もおり、効果は今一つと捉えているので、実施方法は要検討と捉えている。
  - ・ オンライン授業の評価をしており、効果があった科目は今後もオンラインで実施するようになる。
  - ・ 対面だと、ユーモアを交えることによる学生とのやりとりができたが、Web授業では内容ばかりとなり、距離を感じてしまうのも事実である。
- 3) 実習科目とシミュレーション教育についてどう考えるか？
  - ・ 講師の先生の「シミュレーション教育の限界をふまえること」という言葉が印象的だった。現場から、新卒者の能力に関して心配している声も聴く。これまで以上に実習でしか学べないことを精選していくことが求められているのを痛感する。
- 4) Webを活用しての遠隔実習の可能性についてどう考えるか？
  - ・ 実習では学生が想像する以上のことが学べるので実習は必ず必要。リアルさや来学が難しいことを考え、患者経験者やご遺族をゲストスピーカーに依頼することをこれまで以上に工夫したい。
  - ・ 都心部では住民とのやりとりも難しいので、地方の住民とのやりとりができる遠隔実習にも期待したい。これに関連した研究ができないかと切望する。



看護学教育CQIモデルVer.1 図1：看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図



看護学教育CQIモデルVer.1 図2：看護学教育の継続的質改善に向かう思考の方向性をあらわす図

## 10. ワークシート (A~D)

### 看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement :CQI) のためのワークシート

所属大学名 \_\_\_\_\_

職位 \_\_\_\_\_

氏名 \_\_\_\_\_

**A**

#### ワークシート A : 自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する

1) 自大学の現状について、現在気になっていることを以下の視点から振り返り、自由にメモしてみましょう。

視点1 : 学生の現状はどうか？

視点2 : 教員の現状はどうか？

視点3 : 教育・研究・社会貢献活動の現状はどうか？

視点4 : 自大学の管理・運営の現状はどうか？

視点5 : 自大学をとりまく地域社会の現状はどうか？

視点6 : 地域社会をとりまく社会全体 (含グローバル) の現状はどうか？

2) 図1を見ながら、1) でメモした気になっていることは、図1のどこに位置するのかを考え、図中に○印をつけてみましょう。

3) ご自身が気になっていることに関連のありそうな事実を、できるだけ多面的に集めてみましょう。

関連のありそうな事実 (メモ)	記入例
【自大学の沿革、設立の理念】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設置主体は学校法人 (私立大学)</li> <li>・地元代々の医師一族が、地域の人々の医療を支える人材を輩出することを理念とし、地域の期待もあり開学した</li> </ul>
【学生の現状】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なんとか定員充足しているが、合格者の学力格差が大きい</li> <li>・授業についていけない学生がおり、個別学修支援ニーズが多い</li> <li>・全員を国家試験に合格させるのが大変な状況</li> </ul>
【教員の現状】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地方の新設看護大学なので教員がなかなか集まらず、教員確保に難渋している</li> <li>・年齢も経験もさまざま</li> </ul>
【教育・研究・社会貢献活動の現状】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部教育だけで手いっぱいであり、研究・社会貢献活動まで手がまわらない</li> <li>・大学院開設は開学時には想定していたが、懸案のまま保留となっている</li> </ul>
【自大学の管理・運営の現状】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医師である理事長のトップダウンで物事が決まる</li> </ul>
【自大学をとりまく地域社会の現状】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基幹産業は農業で、人口流出が激しい</li> <li>・大学には地域創生を期待されている</li> <li>・附属病院はないが、地域の医療施設とは良好な関係にある</li> </ul>
【地域社会をとりまく社会全体 (含グローバル) の現状】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会保障費の増大が国家予算を圧迫</li> <li>・地域包括ケアシステムの構築が進んでいる</li> <li>・病床機能分化が進んでいる</li> <li>・大学進学率の上昇</li> </ul>

4) ご自身が気になっていることと、それをとりまく自大学・地域・社会全体は、どのようにつながりあっているのでしょうか？ その関連性を記述してみてください。(メモや箇条書きでよいです)

# 看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート

**B**

所属大学名 \_\_\_\_\_ 職位 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

ワークシート B：自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとして語る

1) 図2の①、②のように、現状とその現状に至るプロセスを振り返りながら、自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとしてグループメンバーに説明してみてください。必要なら、以下に、説明用のメモを作りましょう。

2) グループメンバーから受けたフィードバックの内容を以下に記述してみましょう。

3) 新たに気づいたことがあれば、以下にメモをしてください。

## 看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート

所属大学名 \_\_\_\_\_ 職位 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

## ワークシートC：学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け、第一歩を踏み出す

1) これまでのプロセスを経て見えてきた③学生・教員・自大学・地域のありたい姿を、ご自身の言葉で記述してみてください。

☆思考のヒント☆ 個人レベル、専門領域レベル、学部・学科レベル、大学レベルなど、どのレベルで考え始めてもよい

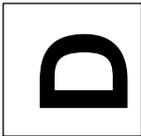
☆思考のヒント☆

- ・図1の登場人物の各々について、ありたい姿を考えてみる（ありたい姿は、自分本位や、机上の理想論ではなく、現実に即し未来に向かう姿として考えてみる）
- ・以下のような問いかけで、図1の登場人物の各々についてありたい姿を考え、短いフレーズや単語で表現してみる
  - 例) 「人々のLifeを支える自律的看護職」、「地域で暮らす人々」とはどのような人か
  - 例) そのためにはどのような「学びの場」があったらよいか、どのような「学生」であったらよいか、どのような「教員」だったらよいか
  - 例) 「地域の保健医療福祉機関」のありたい姿とは
  - 例) 学生が実習で看護を提供する「看護の対象となる人々」とはどのような人であったらよいか

2) 見えてきたありたい姿に向かって、今、何ができそうか、何をしてみたいか、なるべく具体的にアイデアを出してしてみましょう。

☆思考のヒント☆ 協力者を具体的にイメージしてみる 脅威はチャンスにならないか？ 弱みは強みにならないか？

# 看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement : CQI）のためのワークシート



所属大学名 \_\_\_\_\_ 職位 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

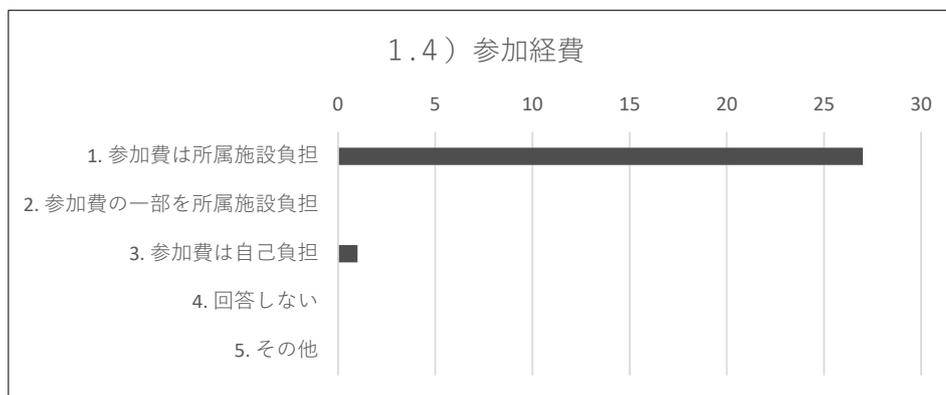
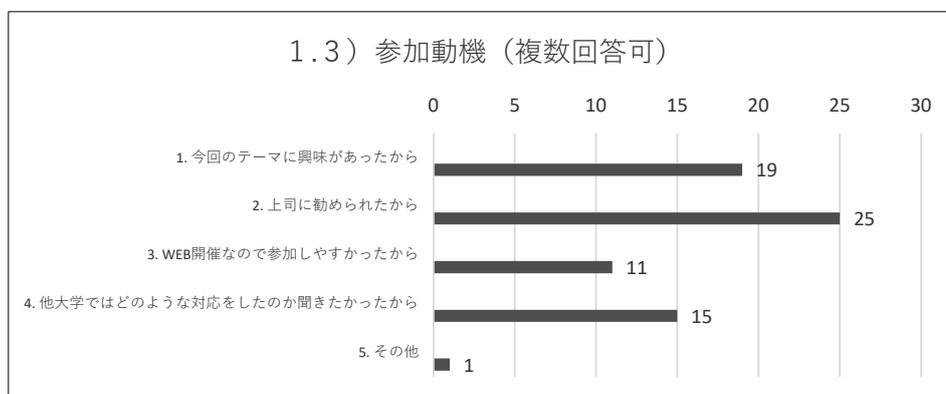
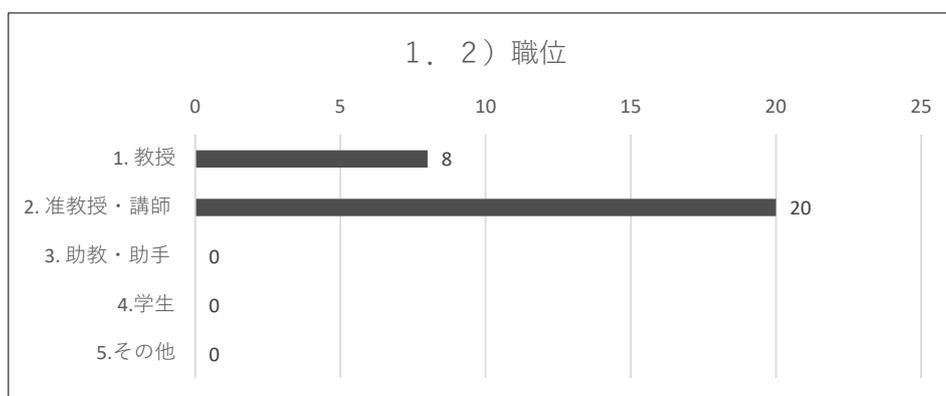
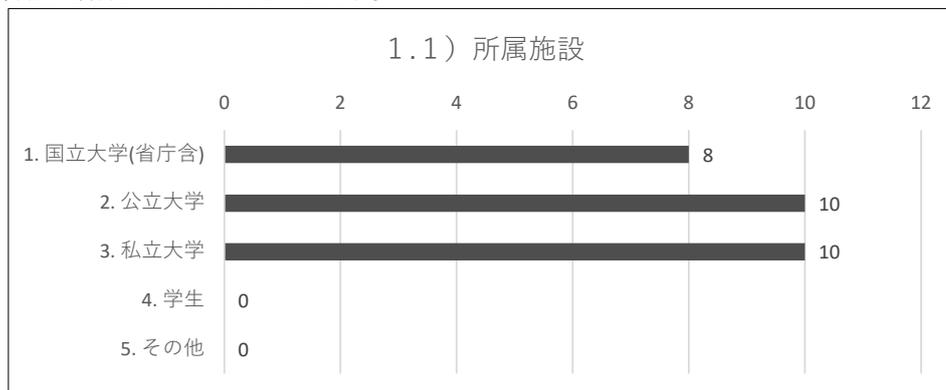
ワークシート D：自大学で CQI を推進する上で必要なこと・課題

- 1) 見えてきたあたり姿に向かい、CQI をすすめる上で、自大学で必要になること・課題はありますか？
- 2) その解決に向けて、どのような戦略をとったらいでしょうか。グループでディスカッションをしてみましょう。

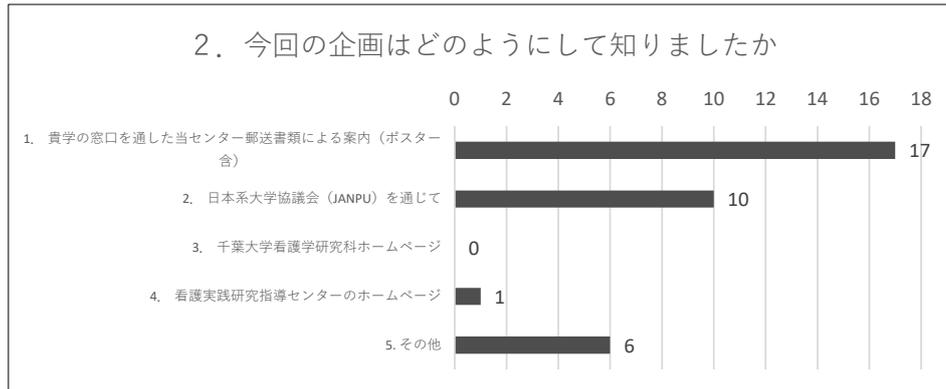
## 11. 令和2年度 看護学教育ワークショップ評価

【全プログラム】回答者：28名

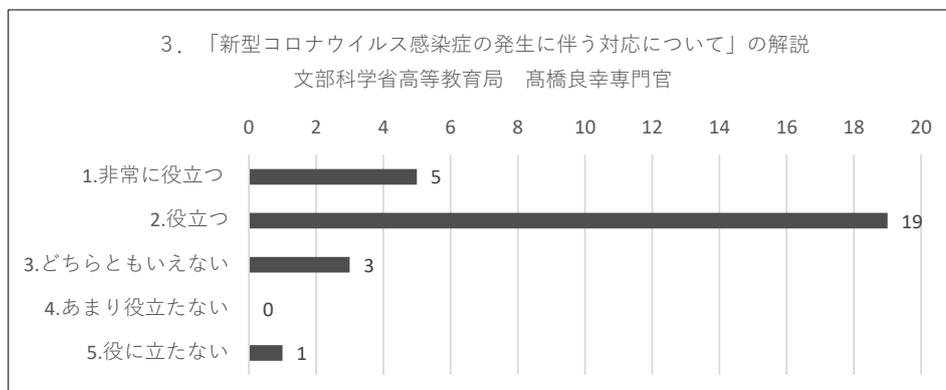
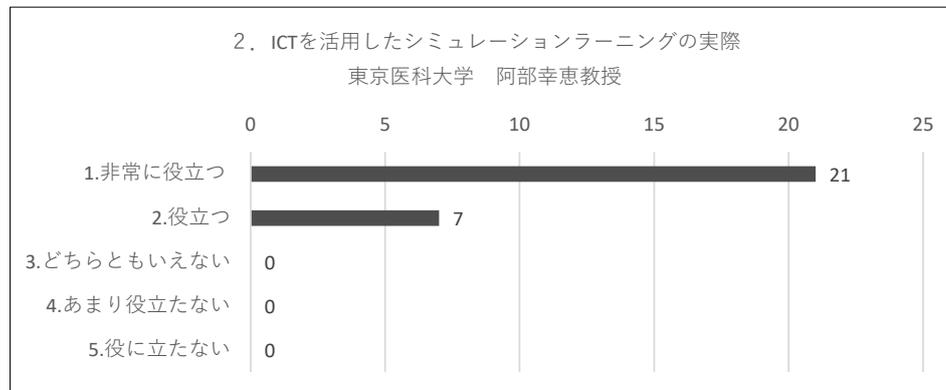
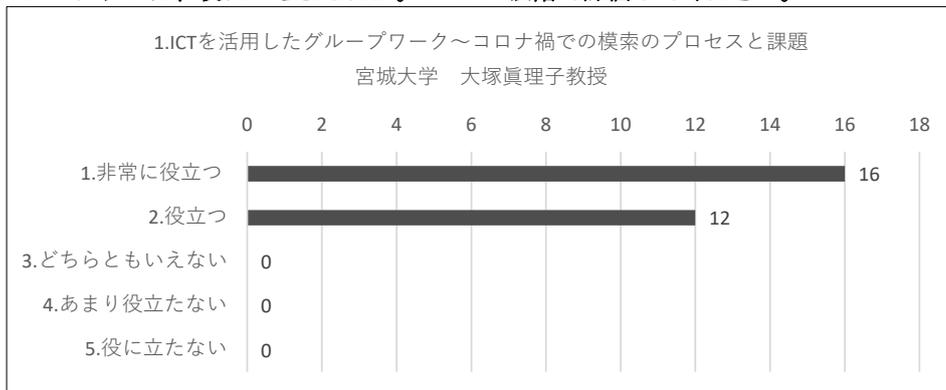
1. ご参加の皆様のご背景についてお伺いします。



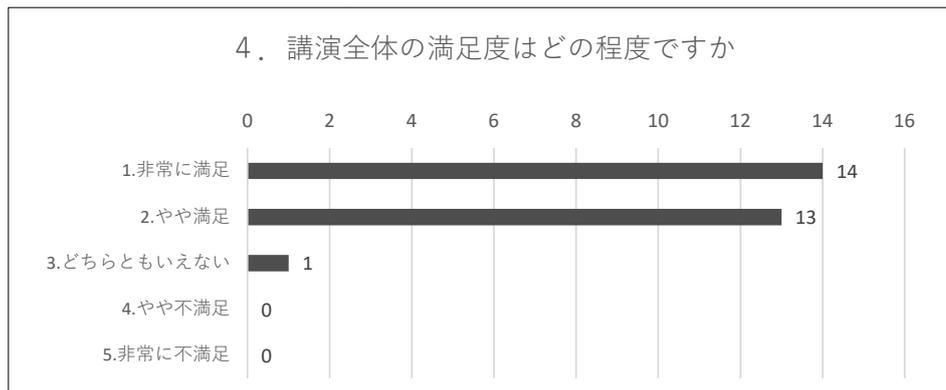
2. 今回の企画は、どのようにして知りましたか？該当するものに○をつけてください。



3. 【講演】のプログラムは、役に立ちましたか。1～5の5段階で評価してください。



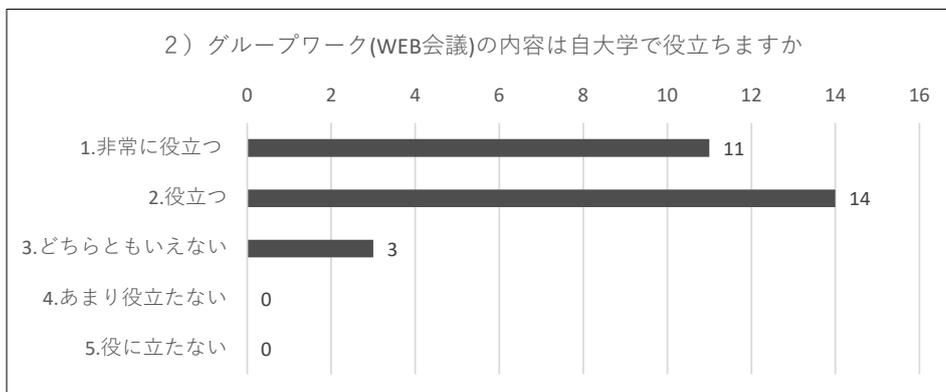
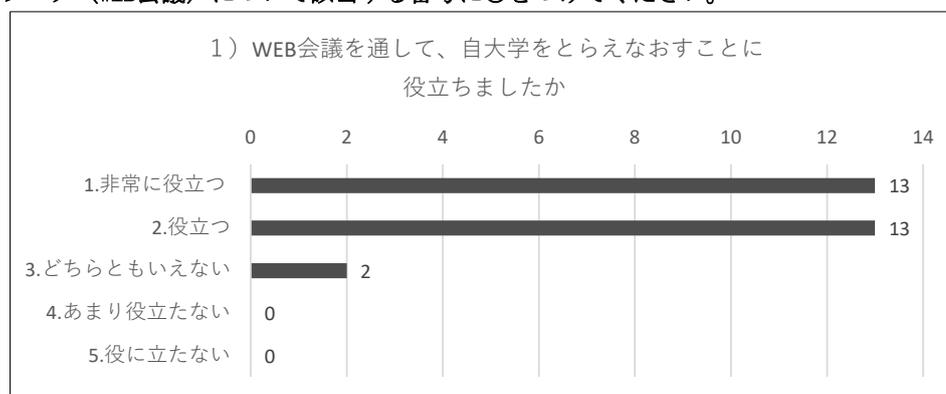
4. 【講演】全体の満足度はどの程度ですか。



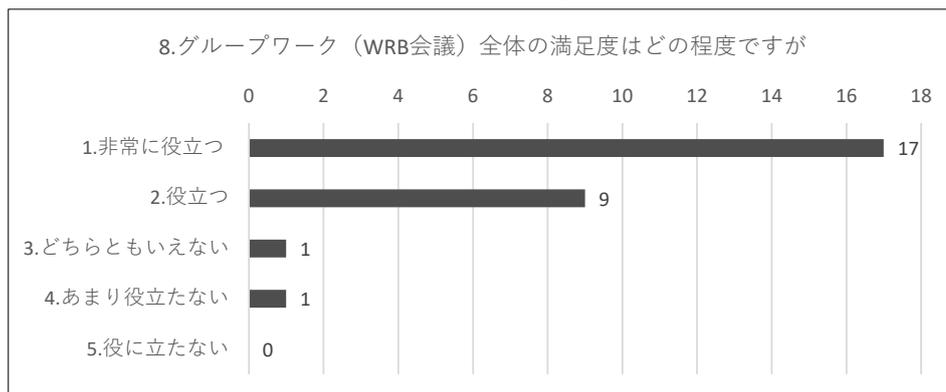
6. WEB開催に関し、お気づきの点がありましたら、ご記入ください。

- ・理解できるまで繰り返し視聴できてよかった。配信開始からワークショップまでの期間が短かったので、もう少しだけ期間が長いとありがたかったです。
- ・質疑コーナーがあったのは良かったです。自分も聞きたい内容を質疑されており、参考になりました。
- ・配信期間が長いと、確認したい時に再度視聴でき、大変役立った。質疑応答も視聴ができたので、先生方が自分の代弁をしてくださっているようでweb開催であっても臨場感があった。
- ・とても分かりやすくwebでも理解しやすかったです。リアルタイムで直接質問ができるとさらによかったです。
- ・資料も見やすくかつ聞きやすい講演で大変良かったです。
- ・気になったところを繰り返し視聴できて助かりました。
- ・文部科学省の方からのコロナ関連の看護教育の考え方が示された内容を確認できたことは有益でした。また具体的な教育方法が示されたことで、自分たちの行っている教育の工夫をさらに広げたり、気付けたりできました。

7. グループワーク（WEB会議）について該当する番号に○をつけてください。



## 8. グループワーク（WEB会議）全体の満足度はどの程度ですか。



## 9. グループワーク（WEB会議）のWEB開催に関し、お気づきの点がありましたら、ご記入ください。

・Zoomのアウトブレイクルームでの実施であり、他のグループの話し声などが聞こえない中で落ち着いてディスカッションできたように思います。ファシリテーションが素晴らしく、それぞれが研修の目的・成果を自分の頭でまとめて終了できたのではないかと感じました。

・他大学の取り組みについて情報交換・共有ができたのは良かったが、どちらかと言えば、本学の取り組みを紹介することが多く、新しい取り組みを知って持ち帰ることは少なかった。ファシリテーターの先生の発言が、論点とずれることがあった。

・ 1. ファシリターの先生の話が長く、話し合いたかった。 2. 時間が短かった。

・WEBで全国の大学の教員と交流できる機会があり、良かったと思います。また、WEBということによるグループワークの弊害は感じませんでした。一人一人の課題についての検討は限られた時間でしたが、他者の課題を聞くことで、自分の課題にも関係することもあり時間的には良かったと思います。

・昨日テスト入室の時間があり、安心して今日のWEB会議に臨むことができました。ありがとうございます。

・他大学の先生方と情報共有する機会があまりない為、貴重な学びを頂きました。早速、この学びを教育にいかしたいと思います。

・時間を気にしてしまうところもあったので、もう少し討議する時間があってもよかった。大学のICT活用の具体的な授業展開を紹介する時間まで設けることができなかった。

・ワークシートを活用したグループワークではなかったため、自大学を捉え直すことがあまりできませんでした。事前課題の作業をとおして自大学の現状や課題は捉えられたと思います。もう少し深めたディスカッションしたかったです。焦点はコロナ禍におけるICT活用の現状と課題でしたので、あらかじめ、シートにその情報を落とし込めていたらよかったと思います。

・同じテーマで対面形式で行った場合との比較ができませんが、個人的には他大学の状況やICTを活用した教育の工夫などを伺うことができ、大変有意義でした。

・WEBに不慣れな私でも、色々と詳細をご説明くださったので、大変わかりやすく参加することができました。

・操作が戸惑うこともありましたが、基本的には困りませんでした。

・WEBでなくフェイス-toフェイスで実際に時間をかけてディスカッションできたらと思いました。WEBは長時間のグループワークは疲れますね。

・ファシリテーターの先生が、とても話しやすい場をつくってくださり、また討議が進むような話題を提供してください、ワークしやすい環境でした。全体会から小グループミーティングへの移行もスムーズでしたし、小グループミーティングも対面と何ら遜色ないと思いました。CQIのワークシートを見よう見まねで作成してみましたが、十分活用しきれなかったような気がしております。10分でも15分でもよいので、グループワーク参加までに（事前課題作成前に）CQIモデルについて解説があると、より効果的な活用ができたように思います。

・移動の必要がなかったので、気軽に参加できました。

・Zoomでの運営も問題なく、特に不自由は感じませんでした。また、遠方の先生方とも交流ができ、メリットが大きいと感じます。

・気づきの点というより、要望になります。全体総括がなかったので、後日、概要でよいので、他グループでは、どのような内容のディスカッションがされたか、まとめのようなものが頂ければと思います。コロナ禍での教育は今後もしばらく続くと思うので、できるだけ多くの他大学の対応策や教育効果（メリット・デメリットの両側）を知り、本学の看護教員にも伝え、本学の教育に生かしたいと思います。その情報が「こうすれば、もっと良い教育ができる」という気づきや、「今の取り組みで良いのだ」という教員の自負や安心に繋がると思いません。宜しく願います。

・最初緊張しました。他のグループの先生からの迷っていることや、困っていること、それぞれの実態を話す中で、自分達だけがいろいろなことに迷っているのではないと、互いに共感できました。先生からのファシリテーターで、気付けない視点などもさらに追加で話すことができました。初めて会う中でのグループワークであるため、取り掛かりのところが十分に行われれば、WEB開催でも効果的に行うことができることがわかりました。

・思ったよりもメンバーを近く感じることができました。（司会の先生が良かったからだと思う）チャット機能や共有画面での共有作業をもっと活用すればよかった（ZOOMに不慣れでワーク時にスキルがなかった）

#### 10. WEB開催全体について感想やご意見をお書きください。

・最初はどうのように展開されるのか不安もありましたが、ほどよいメンバー数、時間配分で、効果的なディスカッションができました。また、今後の自大学でのカリキュラム改正や教育技法の発展に向けて多くの気づきや学びを得られたと思います。ありがとうございました。

・ワークショップ自体は全く問題なかったと思います。ただ、対面であれば得られたであろう、参加者の先生方とグループワーク以外で交流する機会がなかったことは、少し残念に思いました。

・ワークシートを記入したが、大学の自己評価に関するものであり、テーマ、開催の趣旨と一致していないと思う。グループワークの冒頭で、参加者が同様に違和感を抱いていたことを知り、午前のGWのテーマを変更させていただいた。

・「看護学教育支援におけるICT活用の可能性」というテーマであったと思いますが、CQIのワークシートの内容にICTの情報がなく、大学の体制についてしか聞かれないことに違和感を感じて臨みました。テーマとシートの一貫性がどこにあるのかよくわからないままでした。参加者からもグループワーク冒頭に質問がありましたので、ワークシートとの関連についてご説明いただけたとよかったです。

・地方の大学であることより、WEBでの開催は参加しやすく良かったです。講演を視聴する期間が設けてあり、自分の時間を調整して視聴することができ、良かったです。

・私がお話しさせて頂いたことが、他の参加者の方々の参考になれば幸いです（あまり参考にならなかったかもしれませんが）。また、和気あいあいとした雰囲気でしたので、思い切って自分の悩みを聴いて頂きました。感謝いたします。

・リモートは経験があったため、特に問題は感じませんでした。グループワークも話しやすい雰囲気です。有意義な時間でした。

・担当FTの先生のネット環境が悪く途中で何度かフリーズし、聞き取ることができなかった。主催者側の環境は整えて欲しい。遠隔であっても、グループメンバーが近くにおりディスカッションしているようでよかった。

・他大学のICT教育やシュミレーション教育の実践が共有できて参考になりました。

・なれないことは緊張しますが、とても有意義で楽しい時間でした。

・参加がしやすく、議論も対面で行うよりも逆にリラックスして行えたような気がします。資料もPC上で見ることができ、楽でした。次年度以降もWebで良いと思いました。

・丁寧にわかりやすくご説明くださりありがとうございました。安心して参加することができました。

・他大学の情報も伺えて貴重な機会となりました。

・WEB会議の限界を感じました。

・今回はICT活用というイレギュラーなテーマであったためか、事前学習のワークシートA、Bで、記載内容として何を求められているのか分からなかった。実施要項には「ICT活用の可能性」とあるが、事前課題の参考資料の「CQIモデル」には「ICT活用」については触れられておらず、事前課題として、ICT活用について書けばいいのか、看護学教育の継続的質改善について書けばいいのか分からなかった。

・ICTの具体的な方法など今回の学びを、活かしていきたいと思います。

・ちょうどこの時期は領域別実習の時期で、千葉まで行くとまる1日、場合によっては宿泊が必要となりなかなか参加しづらい時期ではありますが、WEBで自大学から参加できたので、参加しやすさと、学びの内容も含めて、非常に良かったと思います。対面ですと、名刺交換等で今後もつながっていくことができる方法があります。WEB開催でもせっかく出会えたご縁ですので、今後も何かつながることのできる方法を得ることができるとよいと思います。

・グループメンバーが教員経験の少ない先生に限局されており、所属大学のICT活用経験も少ないようでしたので、他グループのディスカッション内容についてもお聞きしてみたいと思いました。また本研修テーマについて、どのようにCQIのツールを活用すると有効であったのかも理解できなかったため、上手く活用された方の例なども拝見したいです。

・滞りなく参加できたと思います。いろいろありがとうございました。

・話しやすい雰囲気であったため、活発な意見交換を行うことができました。ファシリテーターの教員に感謝します。

・自大学だけで知りえない情報を知ることが出来ました。前向きな意見もいただけて有意義でした。

・事前課題用紙A・Bについてどのように記載することが求められるのかがわかりにくかった。また、事前課題を進めていくなかで「看護学教育CQIモデルと照らし合わせて（どこに位置するか？○を付ける）考える」という点においてもこのモデル？概念の考え方、意味の理解にいたらなかったため、ご説明頂きたかった。

- ・他のグループのディスカッションがどのような内容だったのかも知りたいと思いました。
- ・こちらも感想や意見というより、要望になります。今回のテーマについて、CQI モデルVer.1 ワークシートを用いた研修結果を作成されたものがあれば、ご紹介頂きたいと思います。CQI モデルVer.1 ワークシートに関心があり、どのように活用するのか、具体例が頂きたいので。
- ・コロナ禍ではこうした方法も考える必要があるが、日本全国の離れた場所からの移動を考えると、こうした方法を一部継続で取り入れることはよいと考えます。ただ集合形態では、他の先生とさらに今後に向けた繋がりが持ちやすいと思います。今回はそうした今後の継続や、他情報交換などはできませんでした。その点が残念でした。
- ・今回WEB開催であったため、業務の間で参加することができた。（集合での研修では実習・授業により参加することができなかった）対面での話し合いも良いが、WEBだからこそ遠方の大学の教員と交流でき貴重な経験となった。ぜひ今後もWEB開催をお願いしたい。
- ・日々コロナ対応で多忙に過ぎているため、遠隔研修で実施して頂くことで参加の負担が少なく済み、大変よかった。他の参加者との交流は少なくなってしまったので残念だった。

## 11. ワークショップ全体を通して、学んだこと、考えたこと、感じたことを自由にご記入ください。

- ・e-learningの内容が、グループワークを進めるにあたって、大変役立ったことを感じます。1大学の中では気づけなかったことや、発せられなかった提案も共有することができ、これからの教育を検討するうえで大変貴重な示唆をいただくことができました。
- ・当初は難しいワークショップかと考えていましたが、夢が膨らむ感じで、とても楽しかったです。やはり教員はみんな疲れているんだなと感じました。私も、目先の事務的な業務にばかり目を向けないように、時々「前を見る」ことを忘れないようにしなければと思いました。
- ・学校による差が大きいこと。一方で抱える課題は共通している。
- ・新しく学んだというよりも、皆さん苦労していらっしゃるということのみ共有しました。
- ・他大学の状況を知ることで、自大学の強み、弱みなどを改めて理解することができました。また、他者の意見を聞くことにより、違う視点から、自己の課題を考えることができました。
- ・コロナ禍のような状況は今後も起こりうると考えられます。その時々に合わせて自己を柔軟にかつ寛容に変化させていきたいと思えます。ワークショップに参加して、視点を変えると解決の手がかりが見つかることを実感しました。
- ・コロナ禍であっても、立ち止まらずに、ワークショップに参加する機会を与えていただき感謝いたします。ピンチはチャンスとはよく言ったもので、WEB開催は、地方在住の者にとって、移動しなくても済むため助かりました。
- ・【事前課題のワークシートA,Bの活用について】今年度の本プログラムは、看護学教育へのICT活用の可能性、課題を検討する研修会だと思うので（そのように解釈し申請書も作成し、大学代表で参加しました）ワークシートA,Bにもう少し自大学のICT活用の実態等項目を増やして、先に情報共有しておくよかったのではないかと思う。今年度は既存のシートに一工夫欲しかった。そうすれば、ディスカッションがもう少し活発になったと思う。前半はどうしても現状の説明で終わってしまったので。時間がもったいなかった。
- ・私個人ができること、大学学部、大学全体でできること、大学間の連携によってできることが整理できました。ICTの活用を検討することで、大学教員同士話し合うことが増え、実習施設とも教育目標を共有しながら、よりよい看護学教育を進めていけることがメリットだと気づきました。全国各地でたくさんの努力や実践が行われていることに触れ、力をいただきました。他のグループの内容を共有していただけるとありがたいです。
- ・対面かICTかではなくて、対面もICTも活用し、より充実した看護教育の内容・方法を考える必要があるのだと実感しました。また、学内でも多様な意見や考え方があがるが、全国の他大学の状況を伺うと更に多種多様な対応や工夫がなされていることが分かりました。未来の看護師をどのように育てるのかは一つの大学だけで考えることではないと改めて思いました。また、ピアコンサルテーションという方法により、ワークショップに参加する前と後では、図1に示した自己の立ち位置の焦点が変化していることに気がつきました。
- ・参加するために宿泊するなど時間がかかるとせっかくの機会も有効に活用することができないが、Webであれば、どこからでも参加することができ、時間的無駄がなくてとても助かります。ですが、一方で実際にそこにいるのワークでないため意見のキャッチボールができなかったり、休憩時間などにちょっとしたおしゃべりができないこと（この時間もとても有効なコミュニケーションの場と考えるので）がさみしい感じもします。これはWeb会議の限界とおもいますが。
- ・今年度と同じテーマで再度行っても面白いのではないかと思います。
- ・CQIやICTに関することはもちろんですが、日頃感じている教育上の困りごとなど「こんな事をご相談しても良いのか？」と思うことも話し合うことができたので、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。先生方の言葉やご助言が色々な心に響き、腑に落ちて、改めてこれから挑んでいくべき多くの課題の基盤となるものを得た気持ちです。また、看護教員として求められる姿勢を見直し、自己の考えを深めることができました。普段他校の先生方とお話させていただく機会はほとんどありませんので、本当に貴重な機会となりました。心より感謝申し上げます。

- ・具体的にいろいろと詳細が伺え、今後に活かしたいと思いました。
- ・ICTに興味があり、コロナ禍での悩みが自大学だけではなく、皆同じように悩み工夫されていることがわかりました。とても良いヒントをいただきました。
- ・最初はかなり固い、参加しにくいワークショップかと思っていたが、参加しやすく話しやすい雰囲気のワークショップであった。
- ・他大学の先生方の貴重な意見を聞くことができ、参考になりました。
- ・他大学でも予算があまりない中で様々な工夫をしながらICTを教育に導入していることがわかりました。実際どのように活用しているのか、講演やグループワークを通して具体を知ることができ、今後の参考にさせていただきました。グループワークで自大学の現状をワークシートを用いて振り返り、また、他大学の先生のワークシートも拝見しディスカッションを進めることで、これまで自大学の弱みだと思っていたことが強みにもなるという視点をもつことができました。
- ・他のWEB開催研修と比較し、費用対効果に疑問を感じました。
- ・他大学の取り組み状況など、とても勉強になりました。また、ファシリテーターの方のお陰で、大変話しやすい雰囲気でした。皆様のいろいろなお話が聞けて貴重な機会となりました。
- ・ICTの利点を活かして新たな教育方法を検討する時期であると感じた。
- ・自大学においては、以下の課題があることが考えられた。課題1 領域を超えた連携、課題2 学生・教員のコミュニケーション力の向上、課題3 ケア対象者の捉えなおし
- ・自大学とどこも同じような問題を抱えていることが分かった。また、自大学の良い点も改めて見つめなおすことができた。何とか現状の課題を打破しようと皆考えている話を聞き、刺激を受けたし、前向きに取り組んでいこうと思った。劇的に変化する社会に対して、学生のニーズを踏まえた、教育の在り方を考えていく必要性を感じた。
- ・他大学の取り組みや教育に対する姿勢を学ばせていただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・全体研修会の参加機会を頂き、有難うございました。研修での学びは本学の教員にも、早速、伝えたいと思います。研修概要をまとめたものを配布する予定です。コロナ禍の中、教員も不安や迷いもある時期、とても有り難い研修だったと思います。
- ・看護系の教育に関しては、ICT教育の活用は遅れていると思いました。もう少し、柔軟に、また、ICTに関する知識を専門の方に教えてもらったり、コーディネートしてもらえらる組織的な取り組み（予算も含め）が必要だと思いました。
- ・ワークショップを通して、学びを得るとともにそれぞれの場で頑張る先生方のお話を聞き、コロナ禍により授業・実習に疲弊していた気持ちが楽になりました。自分がやってきたことを認めていただけたことも大きいと思います。
- ・ICTを用いても、学生に伝えることの本質は変わらないこと。また海外の進んでいる国（アメリカ）ではコロナ以前から遠隔授業は行われている話を聞き、コロナが収束しても活用することで様々な可能性が広がると思いました。他大学の先生方から各大学の現状について話を聞き、非常に参考になりました。

## 12. ワークショップ全体を通して、他の看護系大学との協働の機会がさらに欲しいと思ったこと、他の看護系大学と協働してさらにやってみたいと思ったことがあれば、ご記入ください。

- ・同様の機会がもっとあるとよいと思います。
- ・看護の単科大学なので、医療福祉系の大学と協働して、学部生同士が交流（合同授業・演習など）することで多職種連携を学ぶ機会があると良いと思いました。
- ・オンライン教材・事例バンクの創設などがあれば助かるので、大学間での協働を推進していきたい。
- ・シュミレーション教育と遠隔地の実習指導。
- ・次年度もWEB開催を希望いたします。
- ・ICTの活用をどのように実施されていったかを、今後教えて頂きたいと思いました。
- ・その後の経過報告等情報共有できればより発展的であると思います。これを機会に共同研究できる機会となれば良いと思います。
- ・グループワークで挙げたことだが、各大学で作成した教材を全国で共有する「領域別の教材バンク」を作ること。
- ・「教材開発」「教材バンク」を大学間協働でぜひ実現させてほしいです。とくに、公衆衛生看護学の教材は少ないです。
- ・「コロナ世代」とも言われる学生たちの卒業時の到達度、卒後の看護師としての実践力を縦断的に調査して欲しいと思っています。学生と教員の不安の軽減につながると共に、何を臨床・臨地につなげていけばよいのか明確になると思います。看護職の成長を長いスパンで捉えることにつながると思います。
- ・自身が持っていたICT教育やシュミレーション教育の概念を変えなければいけないと思いました。どんなことでもそうですが方法は1つではないですので、自分の概念を打破して今の時代のいいもの、継続し大事にすべきこと両方を考え看護教育ができるようにしたいと思いました。

- ・本年度と同様、ICTについて。
- ・ICT活用における協働の機会を提示いただけたら、是非ともに考えたいと思います。
- ・今年度は「コロナ禍におけるICT活用の実際」について意見交換をしたので、次年度は「ICT活用の看護学教育の質保証や改善」についてのテーマであれば興味がある。
- ・看護教育の質を高めるための企画を引き続き希望いたします。
- ・設置主体によっても現状が異なってくるように思えたので、今回のように混合した場にプラスして、国立、公立、私立それぞれで協働する場もあればよいのではないかと思います。
- ・本テーマにおけるCQIのツールの活用方法について十分理解することはできませんでしたが、自分なりに取り組むことで、視野を広げることができました。グループワークで専門分野の異なる先生方のお考えが聞けたことは有意義でした。
- ・引き続き、ICT関連の情報が欲しいこと、また他大学のカリキュラム対応について知りたいです。
- ・試行錯誤で行っている教育方法の成果のとりまとめを協働で行いたいと思った。
- ・今回の研修のフォローアップ。課題として浮き彫りになったことに対して、どう取り組んで改善していったか、近況報告の会のような……。自大学しかわからない状況でしたが、他大学の様子や取り組みを伺い、看護教育を担う者同士ととても良い機会を頂きましたことに感謝いたします。
- ・コロナ禍における取組みや学習方法の変更による学生への影響、知識面だけでなく看護技術等の学修状況について、大規模な調査研究の機会がほしいと思います。
- ・コロナ禍の中で、まだまだ遠隔教育も併用せねばならず、学外実習もままならない領域もある中、代替え教育のアイデアや安心材料となる情報が得られる機会や協働作業の機会があればと思います。
- ・看護系大学のICT活用の上での教育方法の実践報告をしながら、情報共有、協働していきたいと思います。他大学の授業に、教員として入らせて頂き、さまざまな教育方法を知りたいと思いました。相互にそうした授業交流ができるとういと思います。
- ・どの大学も独自教材を作成している。各大学の特徴に合わせた内容であるが、教材や教材作成の知恵を共有できるプラットフォームがあるとよいと感じた。大学を超えて同じ専門領域の教員と教材作成を試みたいとも感じた。
- ・カリキュラム編成や構築、DPとカリキュラムとの関係など。

### 13. 次年度の看護学教育ワークショップ企画へのご要望やご意見をご記入ください。

- ・今年度はコロナ禍にあつての応急的な実習の方法やそこでの課題が話題の中心でしたが、次年度はあらたな局面を迎えていると思いますので、継続的質改善の視点から、教育その他で変化したことのその後の状況についての共有や、さらなる発展に向けた議論などができるとよいと思います。
- ・日々忙しく疲弊している教員にとっては、今回の企画のように「夢を語る場」「自分が大切にしている思いなどを語る場」があると良いと思いました。
- ・内容に関する要望ではないが、テーマと事前課題等の整合性が取れるようお願いいたします。オンラインであれば地方の大学の先生も参加できるので、コロナ感染が多少収まっても、次年度もオンライン開催で良いかもしれません。
- ・ファシリテーターはご自分のことをあまり語らず、ディスカッションさせてほしいと思いました。
- ・各大学が強みというか、他大学に情報提供も含め支援できる内容を登録するなどし、自大学の課題について解決したい時に活用できるシステムがあればよいと思います。
- ・WEBで開催されると、遠路はるばる上京せずに様々な先生方と交流できるので、WEB会議をぜひ続けてほしいです。
- ・同じICT関連のテーマで、より多くの参加者にこのテーマを学んでほしいと思いました。
- ・この1年、各大学でICTを活用した授業や演習、代替学内実習等、工夫した取り組みをされたと思うので、実際の授業展開等具体案を共有するワークショップに参加したい。
- ・コロナ禍にあることは変わらないと思われしますので、同じテーマでお願いします。
- ・看護教育に携わる者同士の悩みや大変さを共有しながらも、明日の教育活動に向けた意欲につながり、さらに実践につながるようなワークショップを企画していただける助かります。（抽象的な内容ですみません）
- ・Webでのワークショップもいいのですが、対面でのワークショップが開催されるといいなと思います。今回、とても細かくいろいろご連絡をいただきました。とても安心して参加することができました。ありがとうございます。
- ・是非今回と同様の企画の継続をお願いします。
- ・アフターコロナにおける看護教育について、興味があります。
- ・ぜひ引き続きコロナ禍での授業デザインの工夫、質改善についてお願いします。
- ・看護系大学の相互のネットワークが推進されることを期待いたします。
- ・対面での開催の場合、Webでも参加できるという選択肢があるとありがたいです。

・ICT関係は本年度喫緊の課題であり、適切なテーマでしたが、むしろ一定の経験を経て、来年度以降よりよいGWが行えるかもしれないと感じました。

・with コロナの時代、ICTの活用は欠かせないものになってきています。しかし、看護に生かせる、新しい機器やシステムを伴ったアイデアは自大学だけで開発・応用できるものではありません。今後出てくる活用可能性のあるアイデアを共有できるような、そんなところを期待できたらと思います。

・ICTを活用した新たな教育方法が検討されているが、看護学教育の本質を教授する方法について検討する機会を設けて欲しい。

・学生や教員のコミュニケーション力の向上に関する取り組みの実際について。

・実習環境等、実習に関する教育についてのワークショップもよいと思います。

・コロナ禍の中で、まだまだ遠隔教育も併用せねばならず、学外実習もままならない領域もある中、代替え教育のアイデアや安心材料となる情報が得られる研修があればと思います。

・ICT活用の実践報告の企画をして頂けると嬉しいです。例えば3日間で2日は対面、1日はWEBなど。内容に合わせての企画を希望致します。

・今回のように、看護教育での課題をタイムリーに取り上げてほしいと思います。

#### 14. 看護系大学相互の支援ネットワークづくりに関し、看護学教育研究共同利用拠点としての当センターに、今後、期待することをご記入ください。

・今回一緒した先生方と、またどこかで再会し、ネットワークが生かされるような仕組みができるとよいと思います。

・それぞれの大学や教員には強みがあると思うので、自分の大学だけでできること・教えられること…といった枠を超えられる機会があると良いなと思いました。具体例がなかなか思いつきませんが、人材交流とかでしょうか。

・ICT教育は今後ますます重要なものとなっていきます。情報リテラシー教育の在り方や、倫理的問題なども含め最先端な問題解決のための情報提供をお願いしたい。

・看護学の発展、看護教育の発展にむけて、タイムリーかつ貴重な情報発信を期待しています。今後も他大学同士、交流できる場の提供をお願いします。

・初めて参加しましたが、非常に有意義なワークショップでした。ありがとうございました。看護教育に対するICT活用は益々必要とされますので、この会がファーストステップとして、段階的に応用編に移るといったようにステップアップした会の企画を望みます。

・はじめて参加させていただき、ネットワークづくりの役割を担っていただいていることを知りました。普段大学間での連携や協働実践はありません。しかし、コロナ禍にあり、実習施設との調整や教材開発において、県内の他大学と協働することが必須であると感じています。他大学と協働する方法、注意することなどありましたら教えていただきたいと思います。メルマガなどで定期的に有益な情報を発信していただけるとありがたいです。

・企画・運営おつかれさまでした。今回のワークショップに参加させていただきありがとうございました。今後も様々な企画をお願いできればと思います。

・大学、組織などの枠を超え、看護学教育で協働のための、気軽に参加できるネットワークがあると いいと思います。

・今後もタイムリーなテーマで、どこにいても学ぶことができるような、今いる場所からでも全国の大学間でつながる機会を得ることができるような、そのような機会をつくっていただけますと幸いです。

・領域を横断した、管理職レベルのピアエデュケーションの機会は、大変貴重かと存じます。今後一層のご発展を期待します。

・今回のようなタイムリーな話題のワークショップを継続して実施されることを期待する。

・看護系大学相互の支援ネットワークづくり、素晴らしいです。同じ領域の先生方とのネットワークを作り、一緒に研究活動などもできたら嬉しいです。

・このようなワークショップ、研修の機会の提供だけでなく、異なる大学の教員が交流する機会をもっと企画していただけると大変ありがたいです。今回のワークショップでも非常に有意義な体験をさせていただきました。

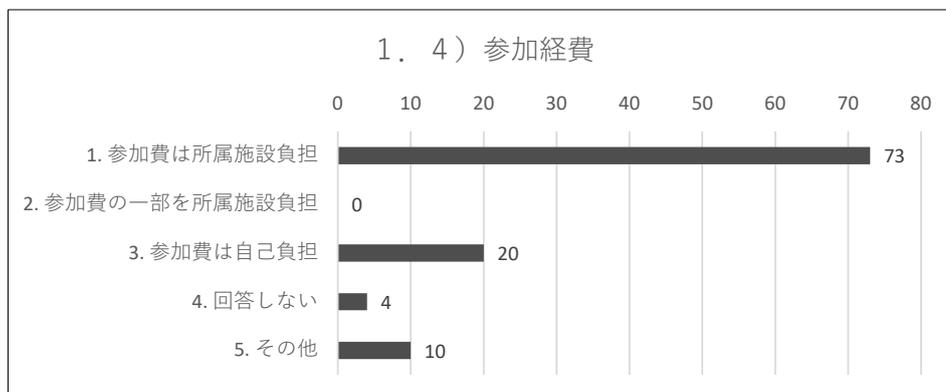
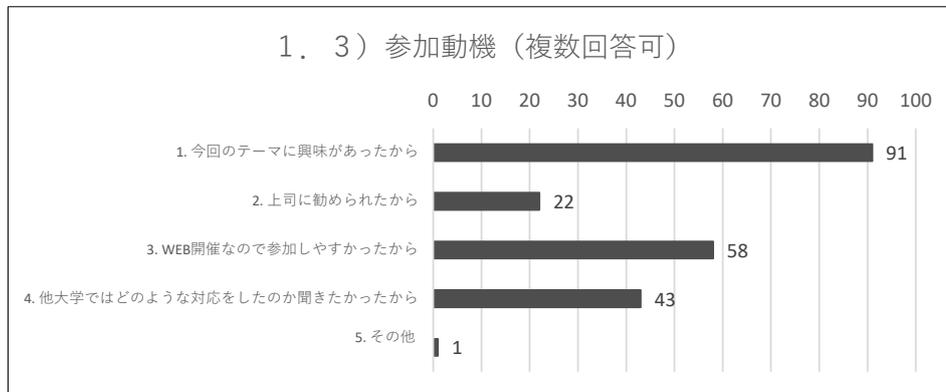
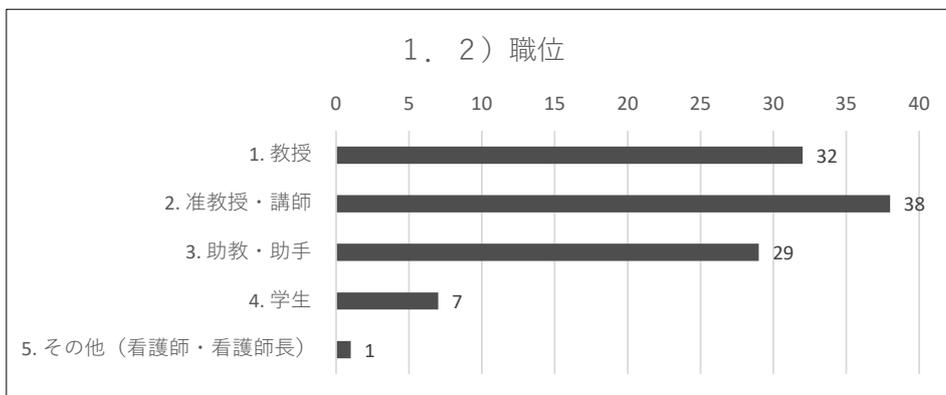
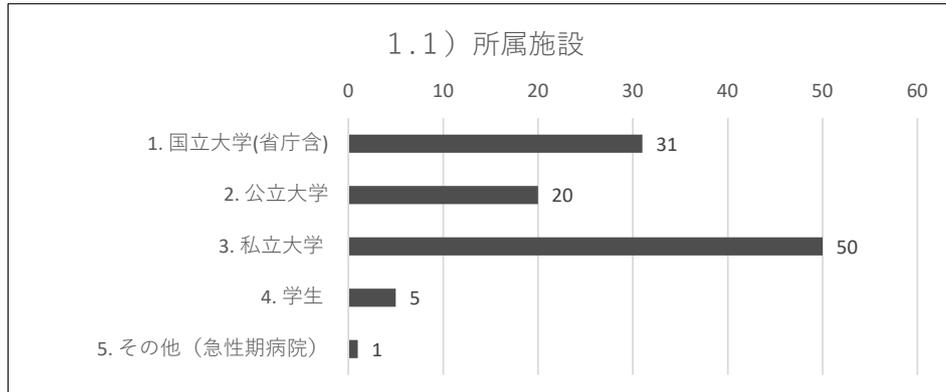
・コロナ禍の中、今回のような研修会はとて有り難いと思い、今後にも期待しています。

・定期的な交流会を開催してほしい。

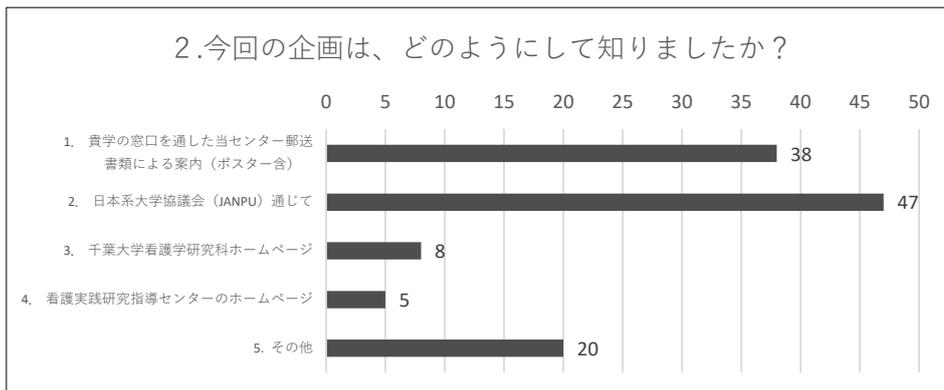
・今回のように、看護教育での課題をタイムリーに取り上げてほしいと思います。

【講演のみ】回答者：107名

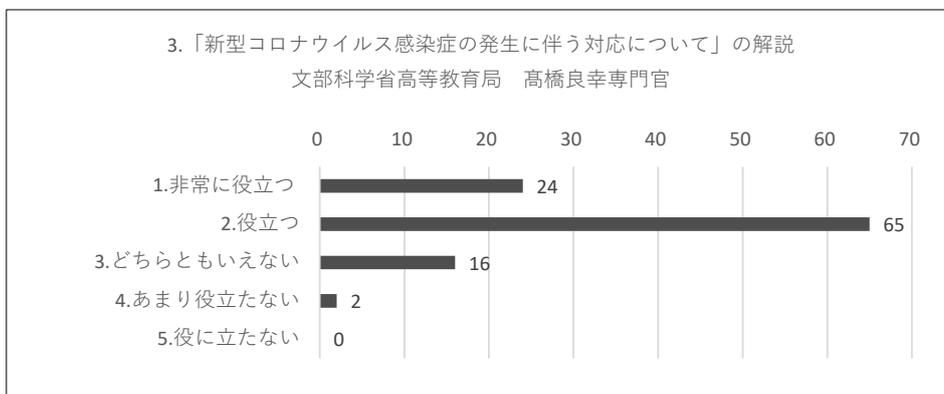
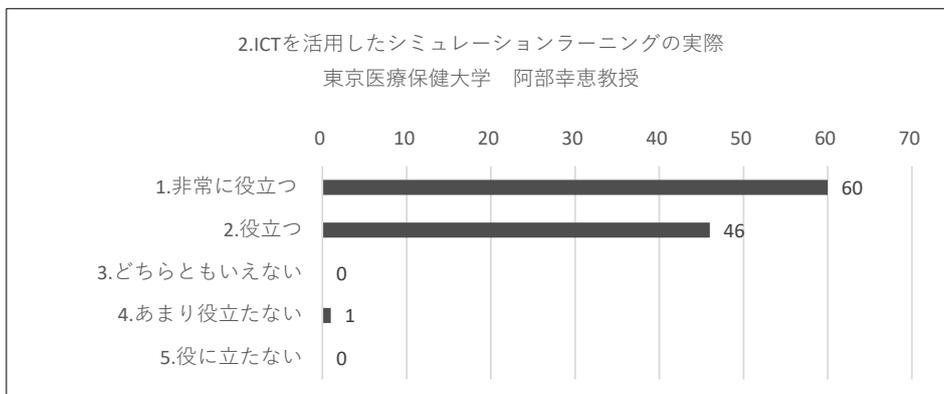
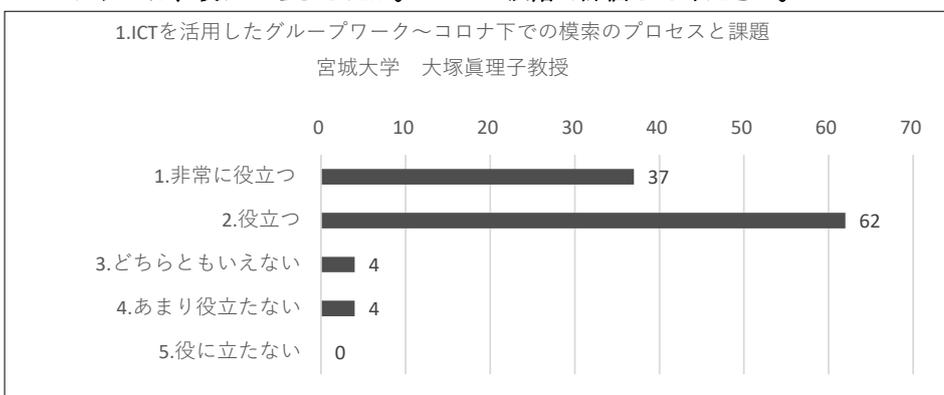
1. ご参加の皆様のご背景についてお伺いします。



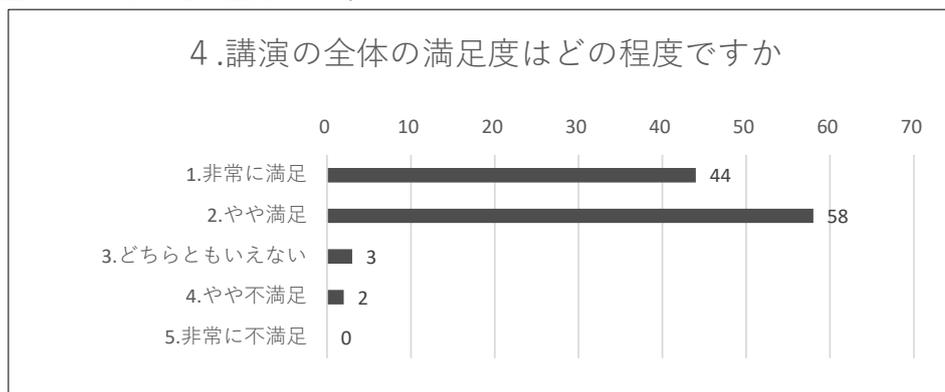
2. 今回の企画は、どのようにして知りましたか？該当するものに○をつけてください。



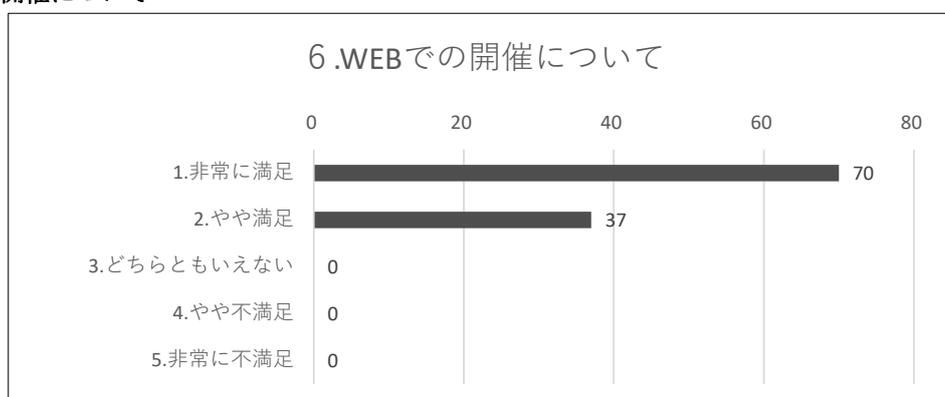
3. 【講演】のプログラムは、役に立ちましたか。1～5の5段階で評価してください。



#### 4. 【講演】全体の満足度はどの程度ですか。



#### 6. WEBでの開催について



#### 7. WEBでの開催について感想やご意見をお書きください。

・ライブ配信も併用していただけるとその時に疑問に思ったことが質問できるのでありがたいです。たまたま本日は閲覧できましたが、授業などで見れない方ように一定の期間、録画を見れるようにしておいていただくと主催者側からの質問内容を閲覧できるのは大変受講者に対して配慮いただきうれしく思います。

・参加しやすいため今後もWEBでの開催を希望します。

・今後は新型コロナが収束しても是非webを活用し、開催いただきたい。地方では移動時間および経費がかかるので、このような方法で開催いただくと大変助かり、かつ多くの参加が可能になります。よろしく願いいたします。

・勤務しているためプログラムの参加はできませんでしたが、WEBで内容を聞くだけでも自分の中では多くの学びや課題が明確になりました。コロナのおかげでWEB開催が増えていることはよかったことです。

・理解しづらかったところを再度視聴することができて、よかったです。

・資料を手元に置きながら開けたのがよかった。時間も短時間にまとめられていて、よかったです。質疑応答も、的確な質問でした。貴重な時間、ありがとうございました。

・WEB開催のため、時間・場所を選ばず、遠方であっても受講できたことが良かった。

・千葉大学のセミナーは、毎回参加したいと思う内容ばかりなのですが、実習のカンファレンスといつもバッティングして参加は諦めていたので、Webで講演だけでも聞くことができて、すごく有難かったです。一度千葉大学に行ってみたいのですが、地方から行くとなると時間とお金もかかります。今後もWeb開催もご検討いただけたら幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

・他大学の具体的な取り組み例を知ることができて本当に感謝しています。コロナ禍でWEB開催のワークショップの開催は、時間や場所を問わずに参加できるので大変助かります。ワークショップの時間も15分~30分内であれば、見逃したということもなく、隙間時間に視聴できるので、今回のボリュームはととてもありがたかったです。

・web開催であり、指定時間に受講しなければいけないことや開催地までの移動などの負担がなく、参加しやすかったです。他大学のコロナ禍での対策について知ることができたことはとても良い学びとなりました。特に実習の代替として行われていたシュミレーション教育の内容については、動画等を用いての講義だったので、イメージがわき、今後取り入れていくにあたって具体的であり、非常に良かったです。

・移動を極力減らすことができるため、WEB上での聴講が有り難かったです。

・自分の空き時間を利用して視聴でき、情報提供・共有の目的は達成された。ただし、講演内容や目的によって満足度、理解度、習熟度は異なるのではないかと思います。今回のような講演については、今後もぜひWEBでの開催を広め、地方の教員も参加しやすくなる工夫をお願いしたいと思います。

・シミュレーション教育に関する内容は参考になりました。

・分割して時間のある時に視聴できてよかったです。資料もダウンロードできたのでよかったです。

・自分の都合の良い時間に視聴することができるため、大変参加しやすかったです。今後もweb配信を継続して頂けますと嬉しいです。

・今回、テーマそのものがWEBで行う必要性もあったと思いますし、地方大学でコロナ禍なので、千葉大で開催されていたら、参加できませんでした。

・Web開催であるため、参加しやすかった。また、オンデマンド配信のため、自分の状況に合わせて視聴することができ良かった。

・行動制限のある中、WEB開催は非常に参加しやすく助かりました。また、時間の制約がないため都合がつけやすいこともありありがとうございます。

・質疑応答もあり、リアリティのあるワークショップが開催されたと思います。

・千葉大から遠いところからの参加は時間と費用の面から制約が多いが、WEB開催であれば交通費が浮く分、人数を増やすことができるなどメリットは大きい。またオンデマンドだと、早口の先生の講演を巻き戻して聞けるため、理解が深まるのでありがたい。センターの先生方の質疑応答もよかった。今後もWEB開催が検討されるなら、初回ライブで講演及び質疑応答を行って、それをその後一定期間オンデマンドで視聴できるようにしてもらえると、視聴者も質疑応答に参加できる。または、オンデマンドと同期間に質問を受け付けてもらって、ある程度まとまったFAQ（文字でもよい）をあとでHPにアップしてもらうなどの方法でもよいと思う。

・web開催でなければ、決して参加することはできませんでした。ワークショップに参加した教員からの情報は、また後日シェアされますが、今は、毎日、ハイブリッドで、授業運営するだけで手いっぱいなので、この動画の視聴期間が短いのが残念です。もう少し長ければ視聴できる教員もいたのに、、と思います。文科省の専門官の話がきちんと聴けることは、このワークショップの機能の重要な点なので、今後もお願いします。ご多忙の中、web開催を実現していただき、ありがとうございました。

・地方の公立大学に勤務しているため、Web開催はあらゆる点で有り難いです。

・時間に縛られず、何度も見返せることができ良かったです。

・状況に合わせて視聴できるので良かった。可能であれば視聴期間をもう少し長くしてほしい。

・ダウンロードできる資料もあり、視聴期間が長く、また途中でリマインドメールも送られてきた。受講しやすかった。

・音声小さかったように思いますが、内容はとても参考になりました。ありがとうございました。

・自宅や職場から参加できるというメリットはとても大きいです。

・期間内であればいつでも聴講できる環境だったので学習しやすかった。聞き逃したところや詳しく知りたいところは繰り返し見れたことが良かった。

・交通費がかからないことと、自分の時間の都合で視聴ができてよかったです。

・聴講場所のWi-Fi環境の影響か音声がやや聞きづらいところがありましたが、質疑応答も含め興味深かったです。

・他大学の取り組みについて知り、自分たちの大学での不足しているところや十分にやれているところがわかってよかったです。

・時間に拘束されることなく、自分の時間に合わせて視聴でき、何度か見直すことができたので、WEB開催のメリットを感じた。

・仕事の合間に視聴しようと考えている間に時間が過ぎ、視聴期限が迫っているとのメール連絡がとてもありがたかったです。各先生方の動画は大変見やすく、自分が作成する動画の参考にもなりました。

・webでの参加は、移動時間がなく、都合のよい時間での視聴ができて大変助かりました。covid-19収束後も、参加方法としてwebでの視聴を継続していただければと思います。

・コロナ禍のため、実習担当教員は県外に研修に向くことが難しい状況のため、Webで開催していただき参加できてよかったです。

・自身の時間が取れるときに視聴でき、参加しやすかったです。また、視聴期間中に繰り返し視聴できるため、理解に役立ちました。

・現地（研修開催地）まで出向く必要がなく、参加しやすい

・視聴期間を3週間ほど設定していただいているので、実習期間中の忙しい中でも好きな時間で講演を聞くことができたため、大変助かりました。また、資料や動画、質疑応答それぞれにアクセスできるようになっていたのが受講しやすいく感じました。

・web上である程度の視聴期間が確保されていたので、移動や日程の都合に左右されず講義を拝見でき大変よかったです。

・各大学での先進的な取り組みについてご発表頂いたことで、本学でのオンライン講義・演習の運営に関して、示唆を得ることができました。ありがとうございました。

- ・母性や小児など今後も実習が困難な領域の学内実習方法や効果を知りたい
- ・Webでしたが、十分情報を得ることができました。視聴しなおすこともできるし、遠方でも参加できるためとても良かった。
- ・資料の配信もあったので、講義の内容も理解しやすかった。
- ・実習等の関係で県外へ移動することが制限される中で、WEB開催の講演により参加の機会が得られたので大変嬉しく思っております。具体的な方法を自分のタイミングで視聴することができ、参加しやすかったです。
- ・自分の都合の良い時に視聴でき、参加しやすかったです。コロナ禍でどのように授業、演習、実習をしたらよいか、迷うことが多かったのですが、とても参考になり、考え方が広がりました。参加させていただき、ありがとうございました。
- ・遠方のため、WEB開催は大変ありがたいです。COVID-19の影響だけでなく、今後もWEB開催併用をご検討いただけますと研究会への参加の機会も増え、大変ありがたく存じます。よろしくお願いいたします。
- ・自分の時間で視聴できるのは良い反面、時間が確保できないリスクもあります。時々事務局からお知らせが来ることで期限内に視聴することが出来たのが良かったです。
- ・時間調整がしやすいこと、繰り返し視聴できることは、利点だと思います。
- ・Web視聴期間を1ヶ月程度に延ばして頂きたい。
- ・貴重な講演をWeb研修での視聴ができたこと大変感謝いたします。オンライン上での臨地実習や演習の工夫など大変参考になりました。現在、当地域は感染の拡大がなく対面での授業や臨地実習が行うことができています。今後COVID-19の感染を考えると、（準備していますが）より効果的な授業や演習・実習ができるように見直しのきっかけになり活用していきたいです。本当に有意義な研修でした。
- ・リアルタイムの質疑応答があるといいと思いました。
- ・COVID-19による感染のリスクを避けるためには、WEBでの開催はありがたいです。移動の負担がないことや、自分の都合のよいときに視聴できる点もよかったです。
- ・開催期間も長く、ちょうどよかったですと思います。ただ、内容が多かったので、どれかにテーマを絞って、具体的な内容なども聞きたかったです。
- ・時間や場所に制限なく、受講できたことはよかったです。講演の内容で資料を読めば分かる内容もあったので、資料を読んだうえで講演を聴いて、新たな知見が得られるとよかったです。
- ・自分の自由な時間に学べる場所がありが良かった。わからなかったところや聞き漏らしたところを、何度も確認できた。講演の長さもちょうどよかったです。
- ・コロナの状況ですので、千葉まで行かなくても聴講できることはとても意義があります。
- ・WEB開催でも、十分に内容を把握し理解が深まったと思います。交通費や移動時間等を考えると、このような参加、開催も有りだなと思います。
- ・Web開催だと時間的に受講しやすくてよかったです。今後もWeb講演を継続してほしい。講演とそれに対する質疑応答がとてもためになりました。参加証明書を発行してほしいです。
- ・大講義ですと、予定が重なるとその時点で参加できなくなりますが、webであれば視聴期間があり自分の都合の良い時間で参加できるので良かったと思います。強いて言えば、質疑応答がオーディエンスとできない状況になるのが、残念だなと感じました。
- ・webセミナーは、何度も確認できるところがよいと思います。質疑応答の部分もあり、そういった配慮があるところに満足度が上がりました。
- ・PPTや画像もPCから鮮明に見えてよかったです。質疑が既に録画されていたが、質問もよく、実際の会場の開催のようでした。
- ・WEB開催は問題ないと思いました。視聴期間が短い。延長して欲しい
- ・視聴にある程度の期間が設けられていることで、参加しやすい。ただ、その場で味わう臨場感がないため、感動が少ない。
- ・質疑応答のセッションもとても役に立つ内容であった。
- ・Webでの配信でしたので、再生速度を変更出来たらありがたかったです。普段から映像は1.5倍速等で視聴することが多いため、そのような機能があると個人的にはうれしかったです。
- ・視聴期間も定められていて時間のある時に聴講できるので良かった。音声をはっきり聞こえる方とそうでない方がいるので、なかなか難しいとは思いますが、音量設定を統一してもらえるとより聞きやすいと思います。
- ・視聴期間を長く設定してくださったため、自身の都合に合わせて分けて視聴したり、繰り返し視聴することができ、とてもよかったです。また、講演のみでなく、質疑応答の動画も作成してくださっていて、より詳しく学ぶことができました。
- ・開催時期が後期実習中であり、参加には宿泊が必要となるため、今後もWebでの参加方法を併用していただけると助かります。

・WEB開催は、隙間時間に自分のペースで視聴ができとてもよかったです。また、視聴期間のリマインドメールを何度も送って頂いたのも有難かったです。そこまでしていただきましたのに、うっかり最終日を過ぎてしまい、全講演を聴くことができませんでした。自身のミスですが大変残念でした。

・この時期なので仕方がないが、質疑応答まで含めての講義と考えると、後日Q&A等についても開示して欲しい。

・web開催のため、時間やスライドの制限など、ご担当いただいた講師の先生方にはご負担をおかけしたと思いますが、内容はとても分かりやすく、沢山のヒントを頂くことができました。

・Web開催は参加する機会や可能性が増えるのでありがたいです。ただし、講演の内容はすでに周知の事実が多かった。今回の内容は、講師の先生が他のセミナーで話していた内容の重複が多かった。参加費を支払っての参加のため、他の無料セミナーと同様の内容では残念に思う。

・コロナ禍においてWEBでの学会、研修会が実施されているが、想像以上にメリットの方が大きいと思いました。繰り返し視聴できる。自分のペースに合わせて視聴できる。視聴しながら、学生がどのような経験をしているのか疑似体験もできる。など。ただ、短期間の中でこのように準備して頂いたことはとても大変だったと思います。タイムリーな話題の提供に本当に感謝しております。

・記録をとりながら、スクリーンショットをしながら、聞きたいところは何回も振り返って聞くことができ、Webセミナーは非常に良かった。

・WEB開催は参加しやすいです。各講演の質疑応答の内容が大変興味深かったため、Live型のWeb開催もよいのではないかと思います。

・看護学教育ワークショップに参加できない教員でも講演に参加させていただくことができ、他大学の取り組みについて学ぶことができ有意義でした。Webなので、現地に赴かず視聴でき、参加しやすかったです。

・各公演後に行われる質疑応答がとても有意義であった。自身が担当する科目において、ICTの強みをどのように活用していけるのか、活用するためにはどのような環境を整備する必要があるのかなど、具体的な教授方法をイメージすることができた。

・対面での講演との差異を感じなかった。パワーポイントも、PC画面上のほうが大きな会場で見るとより見やすかった。

## 12. おわりに

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 准教授  
黒田 久美子

本年度、新型コロナウイルス感染症の影響により、看護系大学では、年度当初から、これまで対面で行っていた教育支援方法を変える必要に迫られた。しかし、そのような社会状況に直面しても、看護学教育の本質を見失わず、様々な工夫で教育が行われている。これを契機に、教育における ICT 化をすすめた例もあることから、本年度のワークショップでは、看護学教育における ICT 活用の可能性をテーマとした。

また、今回のワークショップの企画・運営自体が、『ICT 活用の可能性』を検討するプロセスとなり、主催者側の我々も大いに学ばせていただく機会となった。

オンデマンド配信で行った講演の部は、約 250 名の方に視聴していただくことができ、多忙な全国の看護系大学の教員にとって、WEB での講演のメリットを実感した。ご自身の貴重な教育経験をご講演いただいた、宮城大学の塚真理子教授、東京医科大学の阿部幸恵教授、タイムリーな情報提供をいただいた文部科学省の高橋良幸看護教育専門官に改めて御礼を申し上げたい。

グループワークは、WEB 会議システムを用いたため、参加者の疲労も考慮してワーク時間を短くしたが、参加者同士の経験や知識による相互支援が可能であることが確認でき、何等かの形態で実施された各大学の遠隔授業や ICT 活用の経験を共有する場となった。さらなる要望や改善はあるものの、看護系大学教員が、参加者同士の相互支援を ICT 活用ですすめる一歩になったと考える。

当センターでは、今年度から、“Society5.0 看護”創出拠点ーピア・コンサルテーションを通じて共創する人間中心の健康支援方略ーのプロジェクトを開始した。本プロジェクトは、最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける人間中心の新たな健康支援方略を検討し、看護学教育への反映、社会への発信を目指すことを目的としている。すべての看護系大学がそれぞれの置かれた場においてその力を発揮することにより、人々が健康に暮らす地域社会の実現に貢献できると思う。それを支えるのが、ピア・コンサルテーション、すなわち、目的を共有し、利害関係のない研修参加者が、グループワークを通して、相互に刺激し支援し合うことであり、今回のワークショップでのグループワークは、まさにこれにあたる。最新のテクノロジーを最良の健康支援に結びつける人間中心の新たな健康支援方略の解明と実装に向け、今後とも、看護系大学教員の相互支援の場づくりを推進していきたい。

## 13. 実施体制

### 【講演】

#### 《講演者》

大塚 真理子	宮城大学看護学群	教授
阿部 幸恵	東京医科大学医学部看護学科	学科長
高橋 良幸	文部科学省高等教育局医学教育課	看護教育専門官

### 【グループワーク】

#### 《ファシリテータ》

Aグループ：	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
	： 高木 夏恵	千葉大学大学院看護学研究科	講師
Bグループ：	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
Cグループ：	黒田 久美子	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
Dグループ：	錢 淑君	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
Eグループ：	石橋 みゆき	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
Fグループ：	手島 恵	千葉大学大学院看護学研究科	教授
Gグループ：	杉田 由加里	千葉大学大学院看護学研究科	准教授

#### 《千葉大学運営組織》

大学院看護学研究科長 中村 伸枝 教授

センター教員会議および実行委員会

◎	和住 淑子	教授
○	野地 有子	教授
	手島 恵	教授
	杉田 由加里	准教授
	黒田 久美子	准教授
	錢 淑君	准教授
	斉藤 しのぶ	准教授
	高木 夏恵	講師
	湯本 晶代	助教
	仲井 あや	助教

(◎ センター長・企画責任者 ○実行委員長)

令和2年度看護学教育ワークショップ 報告書

---

発行 2021年 2月

編集 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター  
野地 有子、和住 淑子、黒田 久美子、錢 淑君、高木 夏恵

発行所 〒260-8672 千葉市中央区亥鼻1-8-1  
千葉大学大学院看護学研究科

---



